# 3．河守北遺跡第５次発掘調査報告

## １．はじめに

この調査は、国道175号線の改修工事に伴い、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施した河守北遺跡の調査である。

調査地は福知山市大江町河守ほかに含まれる国道175号線の北側に接した現在の集落域で、由良川左岸の平野部および台地上に営まれた河守北遺跡の範囲に含まれている。河守北遺跡ではこれまでの４次にわたる調査で、弥生時代から平安時代に至る各時代の集落関係の遺構・遺物が検出されている。また、布目瓦片が数多く出土しており、古代の寺院跡または官衙跡が近くに存在するものと推定されている遺跡である(第１・２図)。

調査は、当調査研究センター調査第２課第２係長森　正、同主任調査員戸原和人、専門調査員黒坪一樹が担当した。現地の調査では、地区内を水路や道路が通じているため、４地区に分け南西側から第１トレンチ420㎡、第２トレンチ530㎡、第３トレンチ530㎡、第４トレンチ100㎡の合計1,580㎡となり、平成18年７月24日から同年12月23日の現地調査期間を要した。また、12月23日には現地説明会を実施した。

本報告は戸原、黒坪が執筆し、縄文土器については、同志社大学文学部大本朋弥が執筆した。

調査にあたっては、京都府教育委員会、福知山市教育委員会、同大江支所、地元自治会、近隣住民の方々の御協力、御指導を得た。

## ２．調査の概要

道路新設予定地内に上記の通り４か所のトレンチを設定し面的調査を実施した。

**第１トレンチ**(第３図)

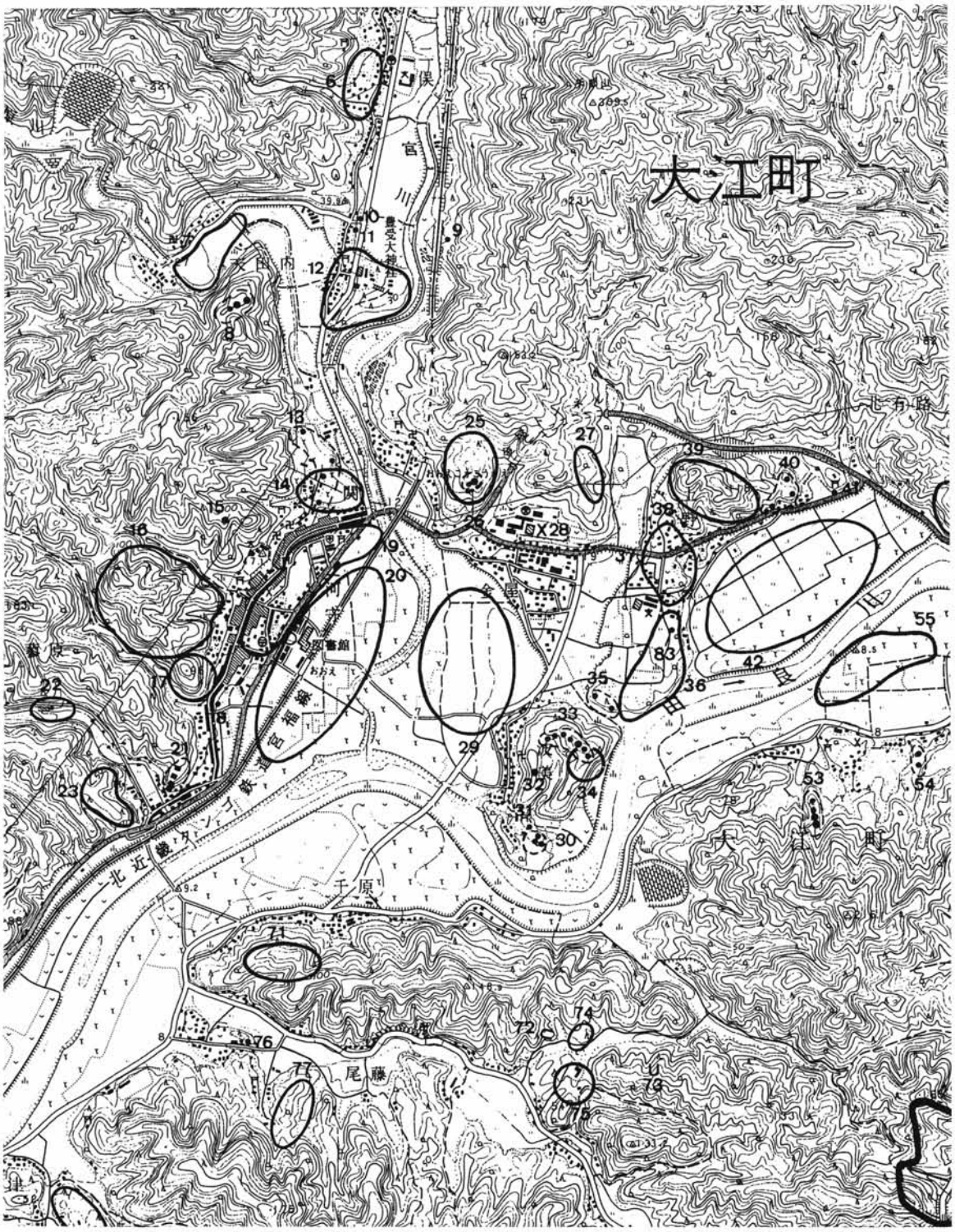
重機で近現代の盛り土と水田耕作土を取り去り、その下の遺物包含層(暗褐色粘質土)を掘り進めた。包含層の中からは、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良・平安時代、鎌倉時代の遺物が出土した。遺物には、弥生土器(高杯・甕)や石器(削器)、古墳時代～平安時代の土師器・須恵器(杯・甕・高杯・皿)、さらに格子目叩きをもつ布目瓦などがある。

包含層下は橙黄褐色粘質土の地山面となり、この面で柱穴・土坑・溝等の遺構を検出し、掘立柱建物跡・竪穴式住居跡の存在が明らかとなった。

**竪穴式住居跡ＳＨ03**(第５図)

調査地の西端で検出した。平面はほぼ長方形(５×3.5m)で、残存する深さは20cmを測る。住居跡の床面では、屋根材などを支えていた柱穴や焼土坑を検出した。出土遺物には弥生時代後期の甕・台付壺・高杯および石器(敲き石)がある。

**掘立柱建物跡ＳＢ01**(第７図)



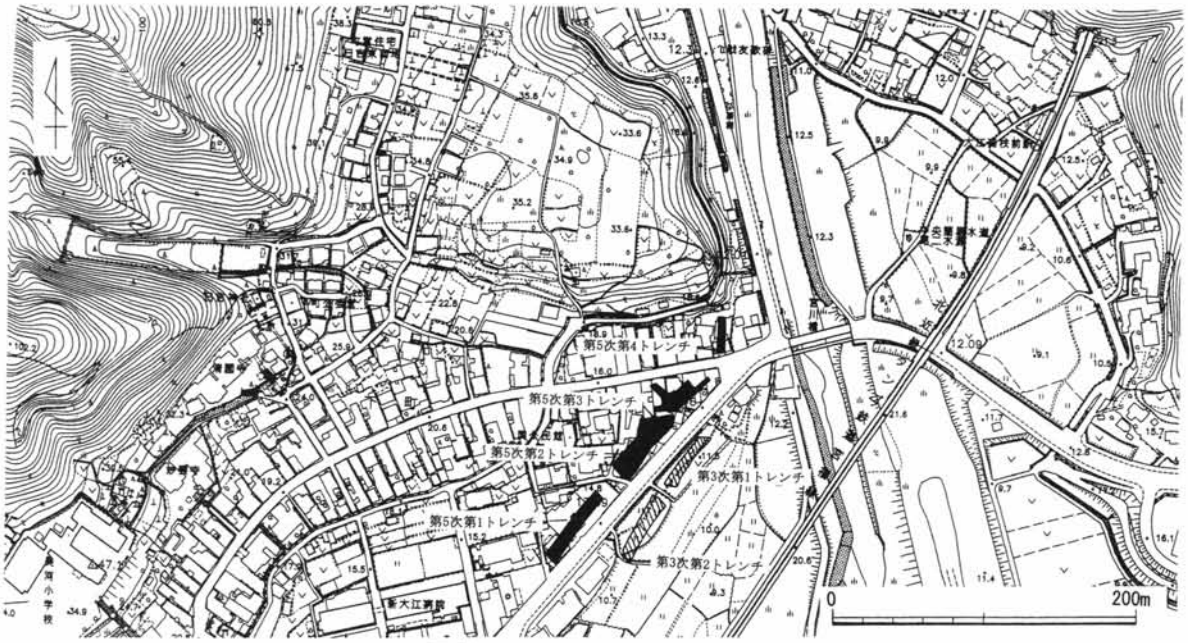

第１図　調査地位置図（『京都府遺跡地図』第３版第１分冊より）

6.河田谷遺跡　7.深田遺跡　12.天田内遺跡　14.段遺跡　16.河守城跡　17.新治城跡

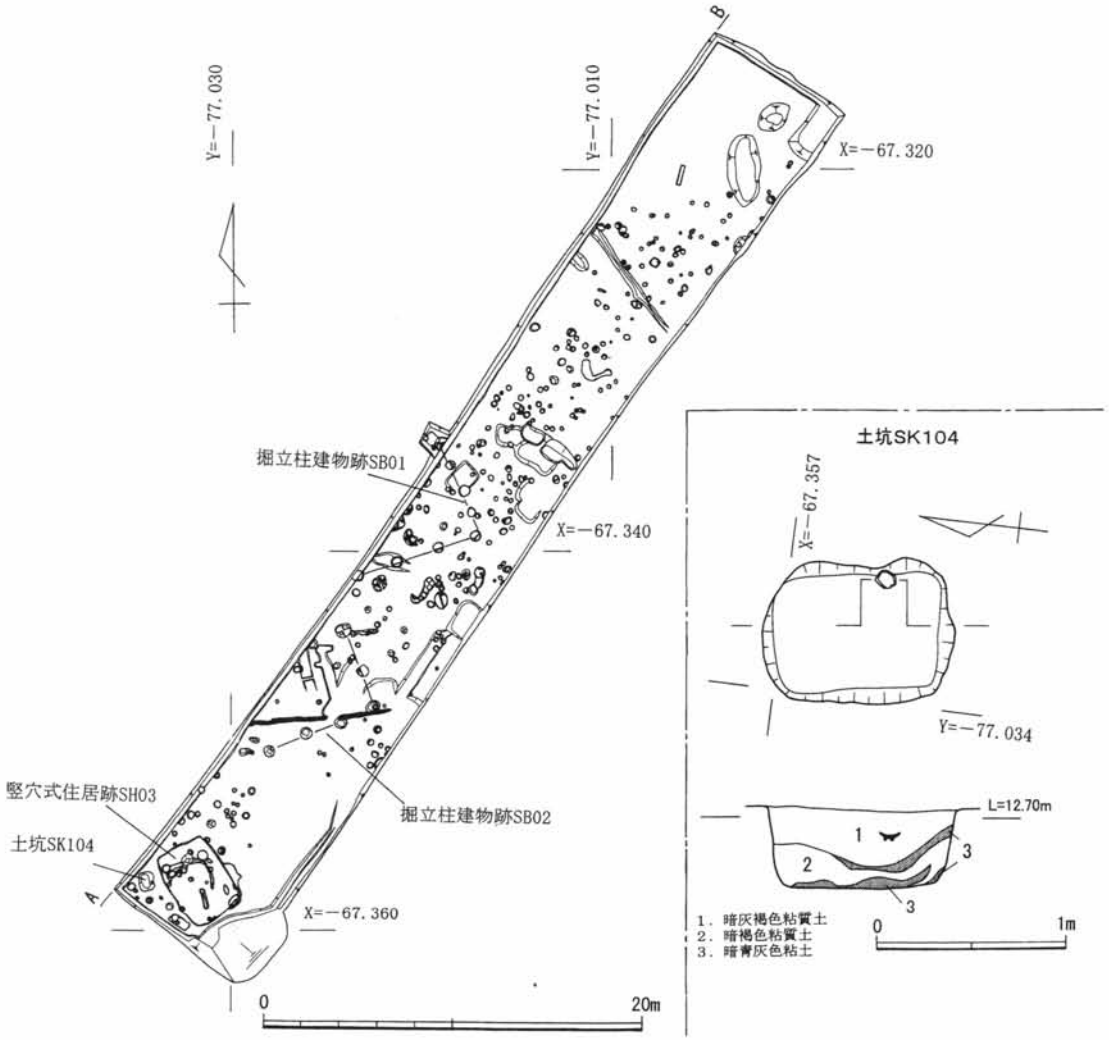
19.河守北遺跡　20.河守遺跡　22.蓼原遺跡　23.蓼原城跡　25.金屋城跡　27.柏谷古墳群

29.金屋波美遺跡　36.平遺跡　38.上野古墳　39.阿良須城跡　42.阿良須遺跡　55.高川原遺跡

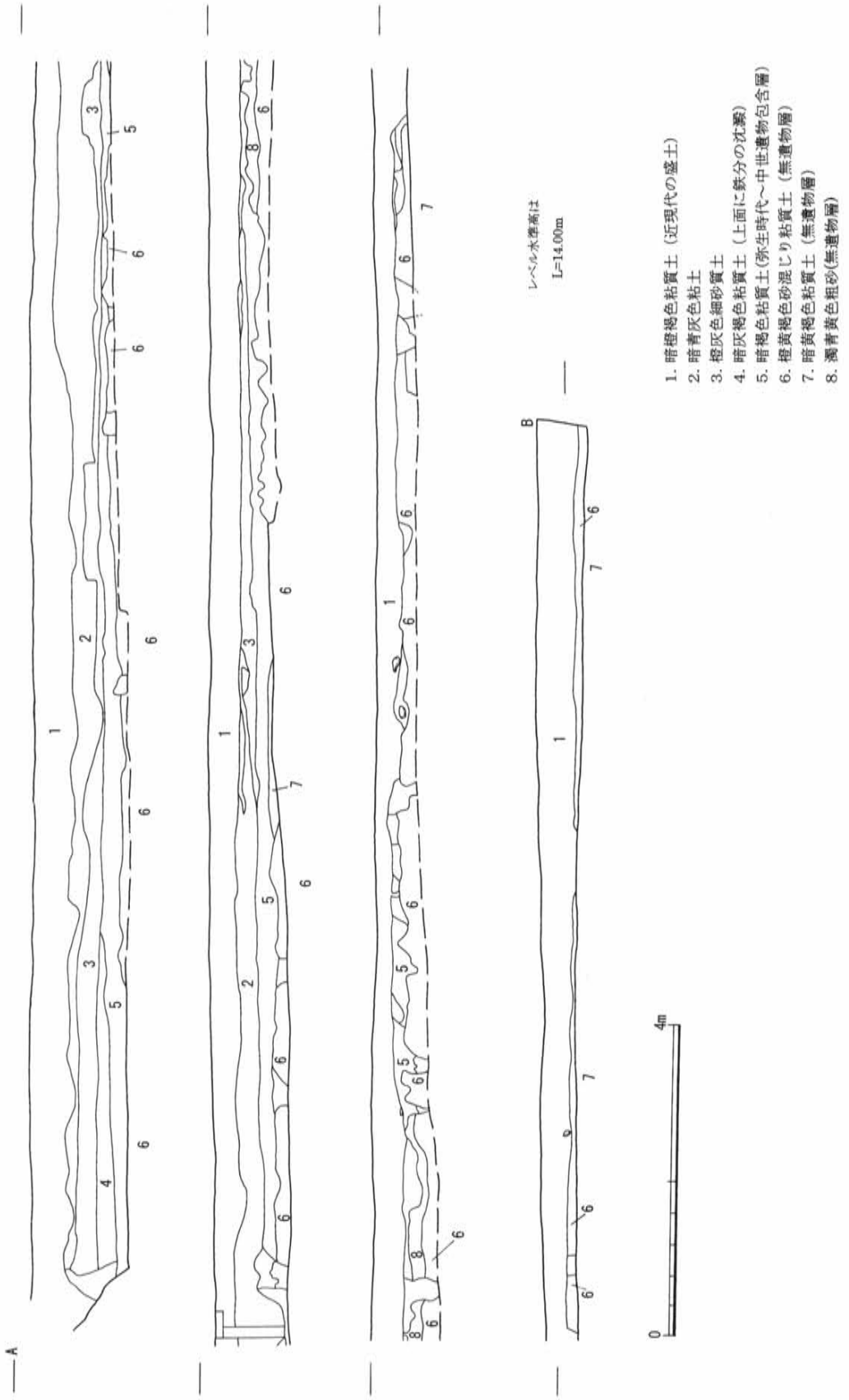
71.千原城跡　74.大石北遺跡　75.大石遺跡　78.常津城跡



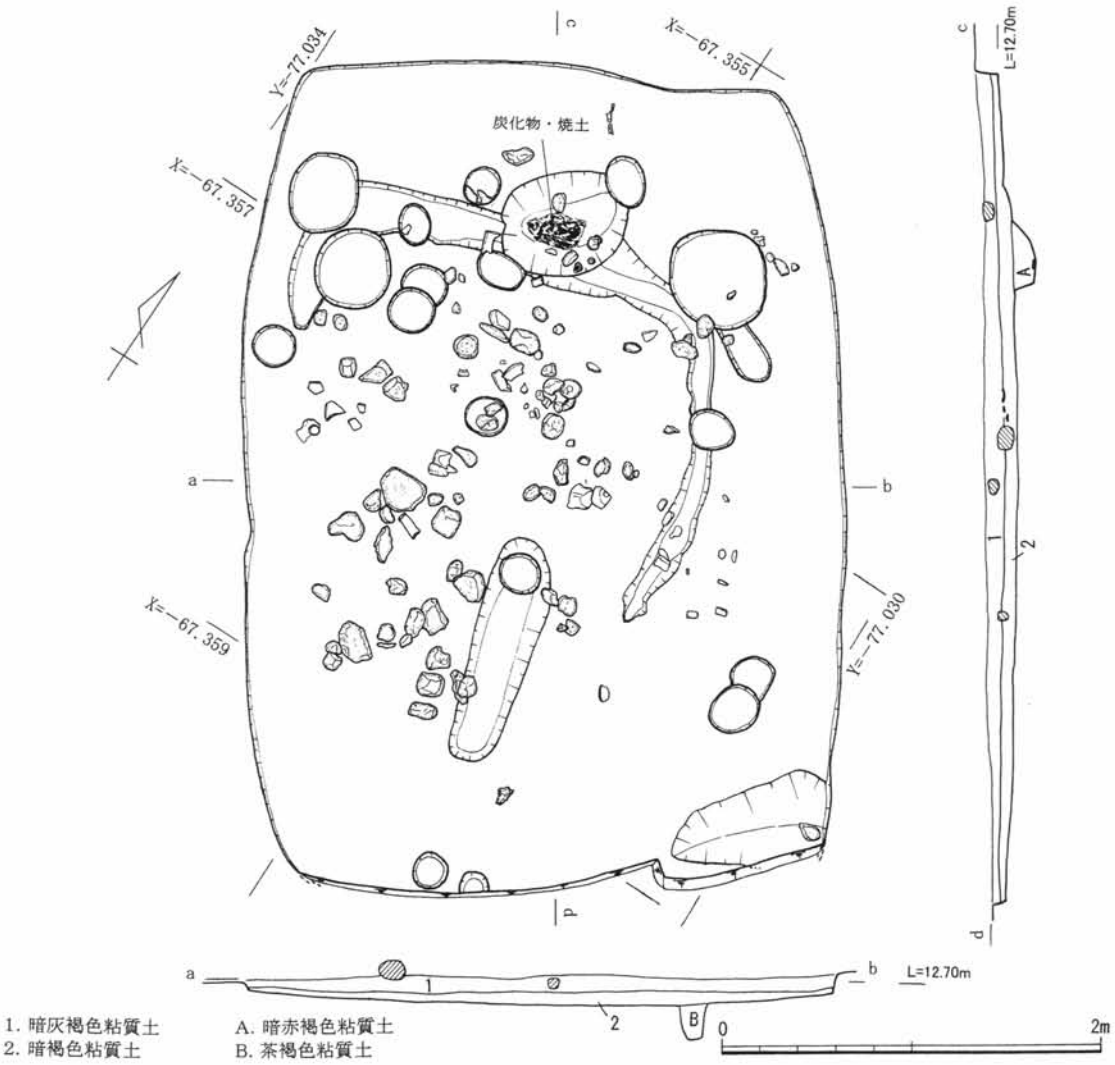

調査トレンチ配置図
第3次トレンチ(斜線部)は大江町教育委員会(当時)による

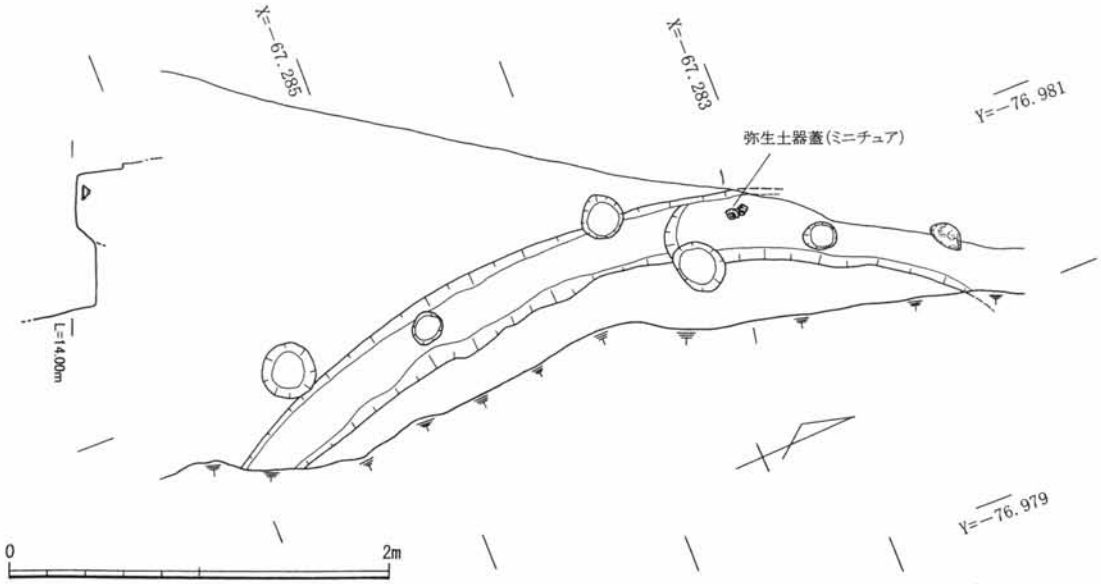



第２図　調査トレンチ配置図（上段）・第３図　第１トレンチ平面図（下段）




第４図　第１トレンチ断面図




第５図　竪穴式住居跡ＳＨ03実測図（上段）・第６図　竪穴式住居跡ＳＨ04実測図（下段）

南北２間分、東西４間分を検出した。柱列のラインは真北軸より約18°西に振れている。柱穴(径45～70cm)の間隔は、東西2.1～2.3m、南北2.3mを測る。柱堀形内からは平安時代の土師器・須恵器の破片が出土した。

**掘立柱建物跡ＳＢ02**(第７図)

南北２間分、東西３間を検出した。柱列ラインは真北軸から約22°西に振れている。柱穴(径50cm)の間隔は、東西2.1m(一部2.3m)である。掘形内からは平安時代の土師器片が出土している。

**第２トレンチ**(第８図)

現在の地形は近現代の開発で削平を受け、宅地造成による顕著な段が生じている。上段面および、下段の国道寄りの部分から、削平による消滅を免れた柱穴や土坑を検出する事ができた。柱穴は平安時代から中世とみられ、直径20cmほどの小さなものが大部分である。

**竪穴式住居跡ＳＨ04**(第６図)

調査地の上段部分で検出した。確認できたのは一部分であるが、円形竪穴式住居跡とみられる。弥生時代の後期の土器が僅かながら出土している。

**土坑ＳＫ201**(第８図)

調査地の北東隅で検出した。約５×３mの大きさで、隅丸方形に掘り込まれている。残存している深さは20～25cmを測る。池などの壁面を塗ったように灰白色の石材がすじ状に検出された。人頭大の礫が多量に投棄されており、それらとともに布目瓦・須恵器杯・土師器皿や中世の陶器製鉢(越前焼)の破片などが出土した。

**第３トレンチ**

調査地の中に水路があるため二か所に分け調査を実施した。

**第３－１トレンチ**(第９図)

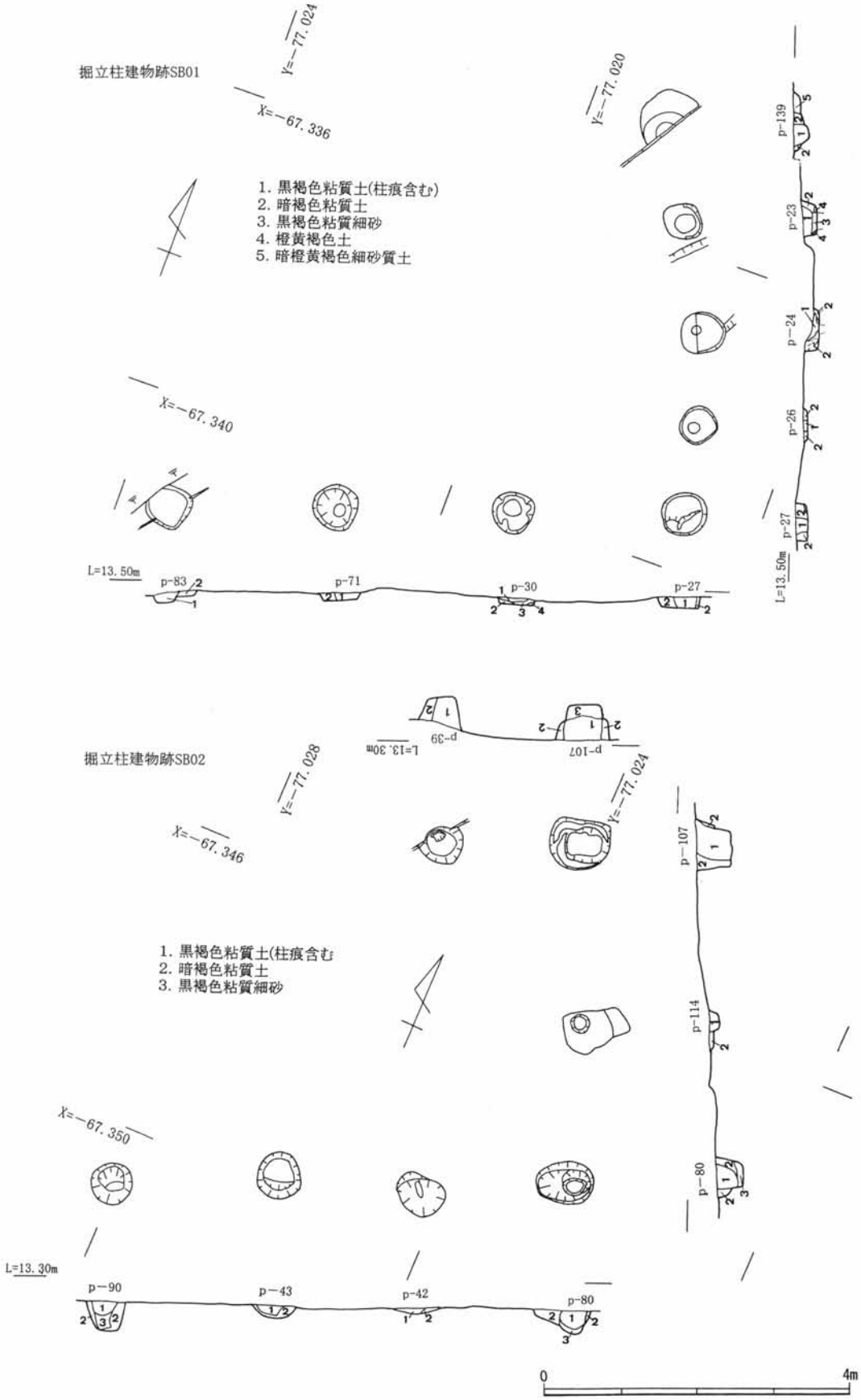
地形は西から東に下がっているが、西側は大きく削平されており、東側では数多くの柱穴とともに２条の柵列を検出した。

**柵列ＳＡ11**　調査地の東よりで検出した。柱穴の直径は約30cmで、深さ約50cmを測り、北で約15°東に振れている。合計10基を検出した。この柱列は第２トレンチの整地による削平を受けており南の状況はわからない。柱間は約1.5mを測り、敷地境にあたる２間分が約３mを測る。

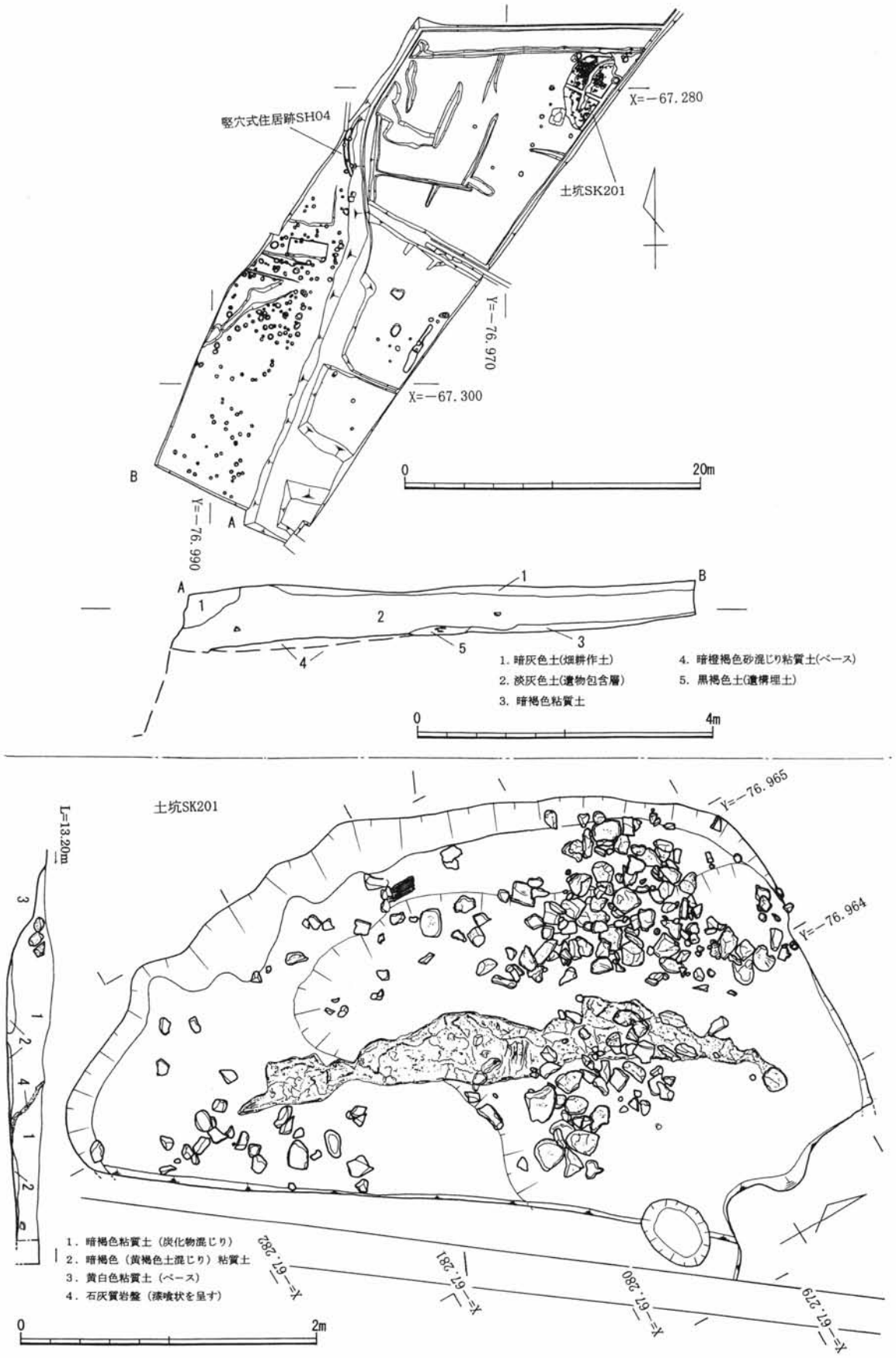
**柵列ＳＡ12**　ＳＡ11の西で検出した。柱列は北で約20°東に振れている。この柱列は第２トレンチの土坑ＳＫ201の西側まで延長しており、第３-１トレンチ内で５基、第２トレンチ内で５基の合計10基を検出した。柱間は北端と南端からそれぞれ３間までが約２m、敷地境にあたる２間分が約３mを測る。

**第３－２トレンチ**(第10図)

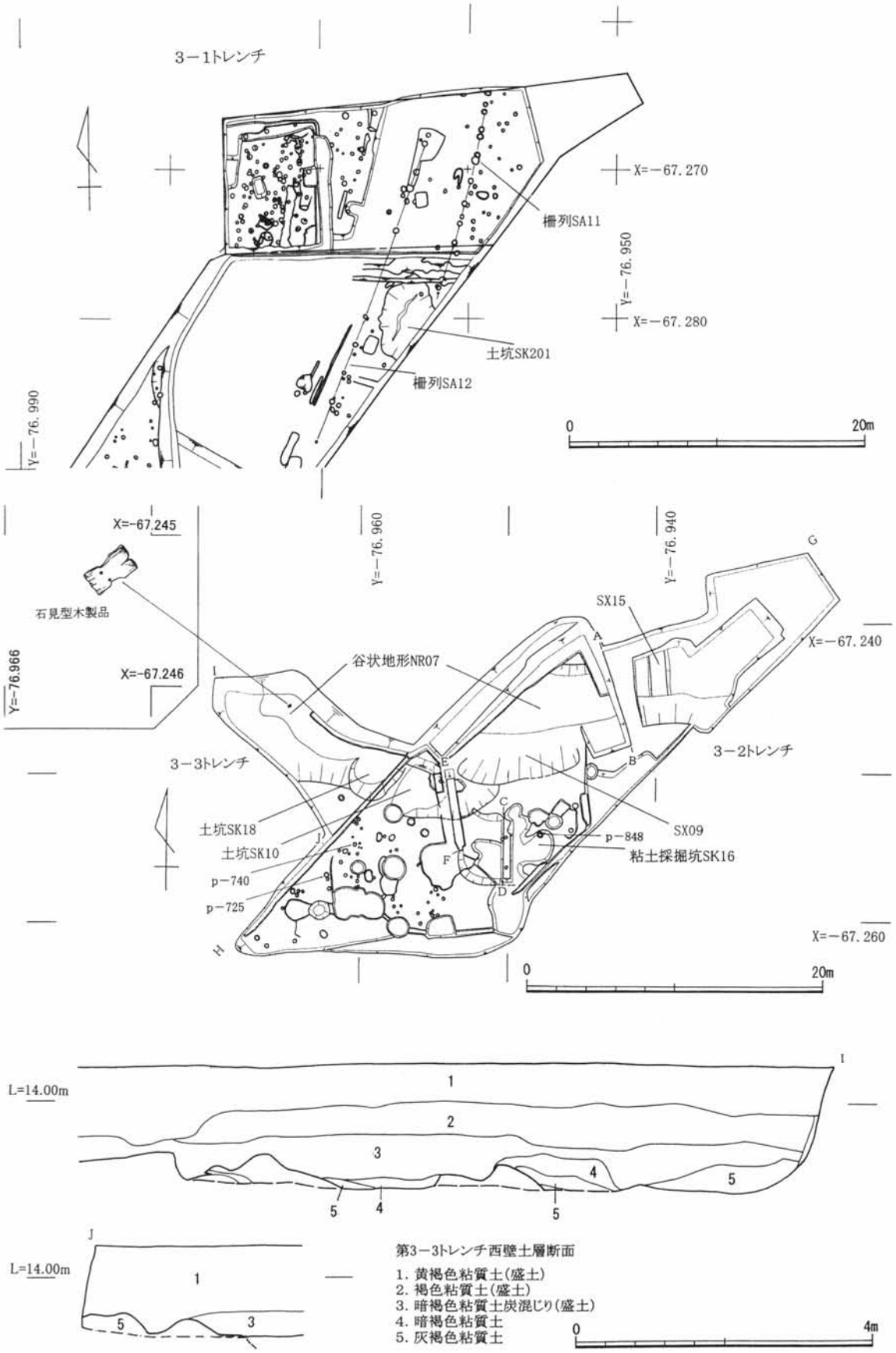
平安時代から中世の数多くの柱穴・土坑(粘土採掘土坑を含む)、弥生時代から古墳時代にかけて埋まった谷状地形(ＮＲ07)・谷底の堰状遺構(ＳＸ15)・谷の肩部で見つかった土器溜まり(ＳＸ09)・土坑(ＳＫ10)などを検出した。



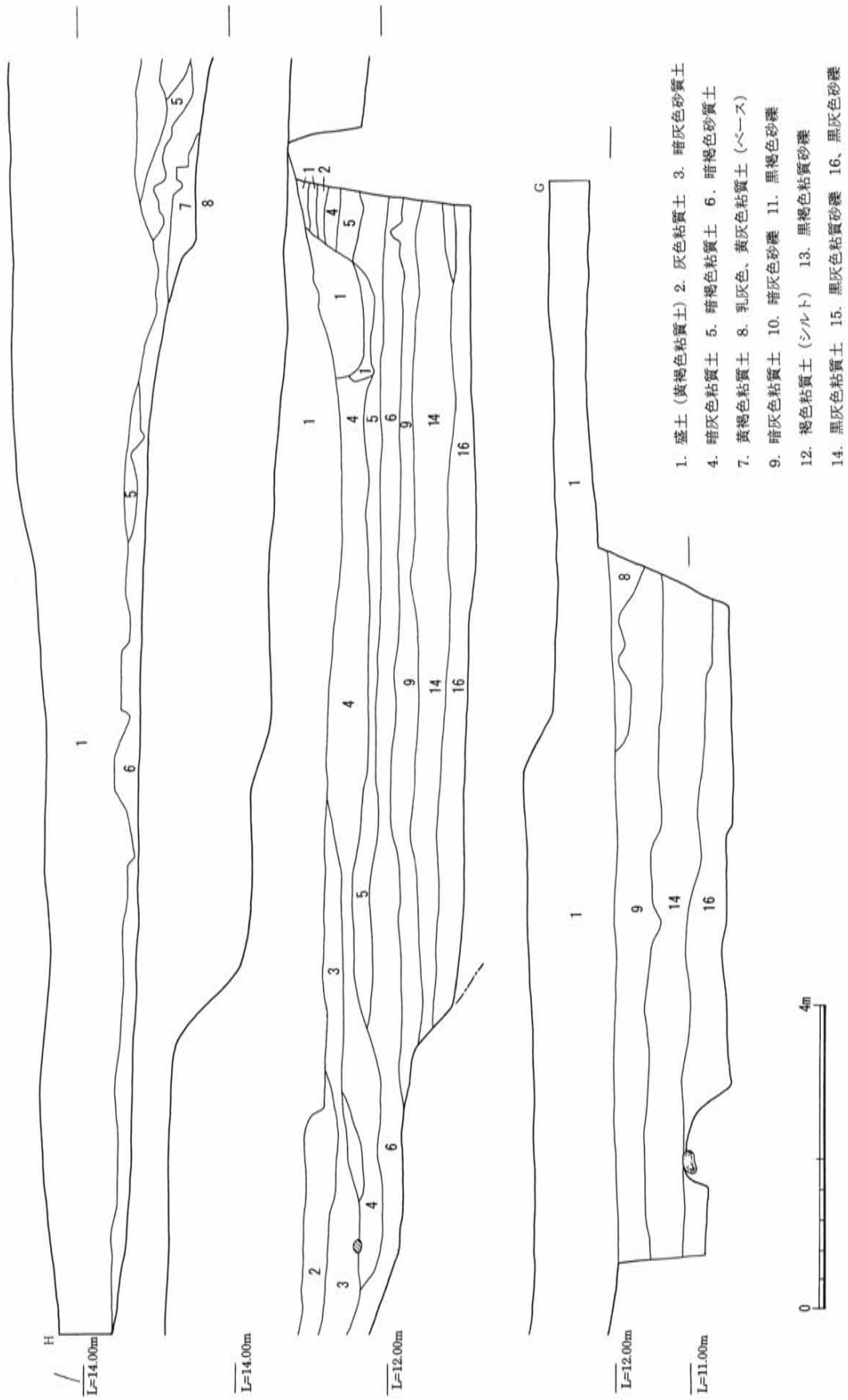

第７図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図




第８図　第２トレンチ実測図




第９図　第３－１トレンチ実測図（上段）・第10図　第３－２・３トレンチ実測図（下段）

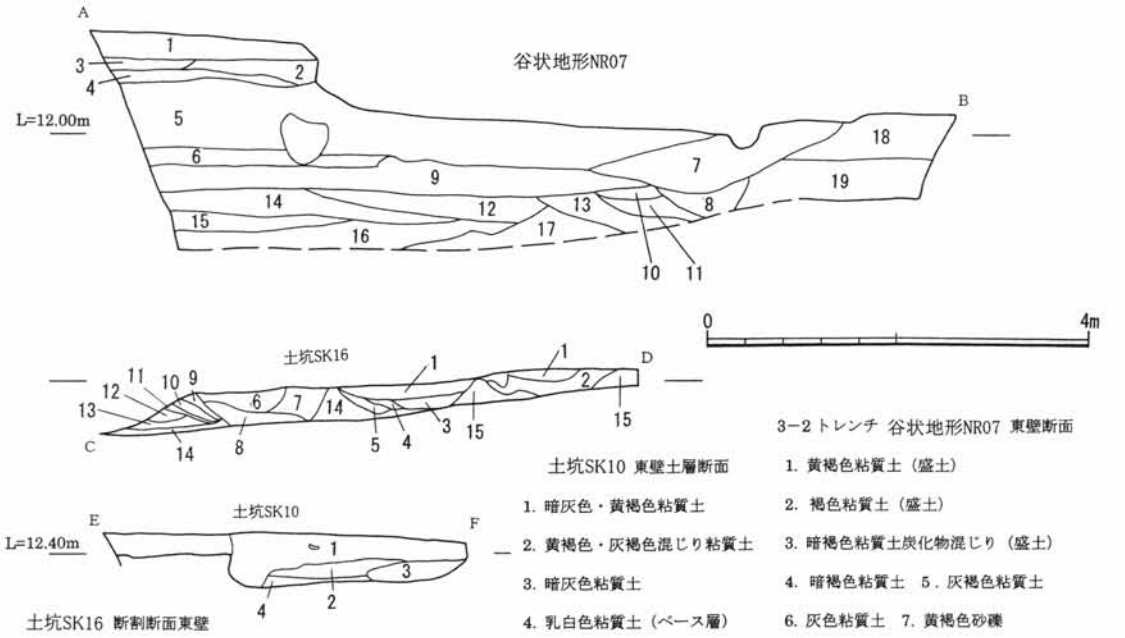



第11図　第３－２トレンチ断面図

**粘土採掘土坑ＳＫ16**　調査地の中央部分で地山の乳白色の粘土層を大きく掘り込んだもので、東西４ｍ、南北３ｍの範囲で不定形に掘り込まれている。埋められた土の中には割れたり焼けひずんだ瓦片や須恵器杯、鉢などが出土した。

**谷状地形ＮＲ07**　西側の山麓から東に向かってのびる低位段丘に平行する開析谷が現在の市道の下に埋没しており、現標高は12m前後である。検出した幅が約８ｍ、深さ約２ｍを測る。第３-２トレンチと合わせ38mを検出した。堆積層は上位の３層が盛り土、第４層から第６層までが最終段階の埋め土である。第７・８層は最終段階の流路で、砂礫によって埋まっている。この流れの肩部は南ではベースが地山。北側は第９層の粘質土で谷側が比較的安定している状況である。以下の層では砂礫やシルトが交互に堆積して最下層では砂礫が厚く堆積している。第３-２トレンチ内では地山土は確認できていない。中層では時々に淀んだ状態の腐植土層や泥土が溜まっていた状況である。調査した範囲の最下層の黒灰色砂礫層からは縄文時代後期の土器、概ね中層の暗灰色砂礫層、黒褐色砂礫層からは弥生時代中期の土器、上層の灰褐色粘質土、灰色粘質土層や南岸の肩部からは古墳時代の土師器が出土している。

**堰状遺構ＳＸ15**　谷に直交するように幅約１ｍで円礫と木杭・板で土手を構築している。川底はこの堰を境に下流側で宮川に向かって深く、滝壺状になっている。堰の上流側はダム状になっていたと考えられ、埋土の中には水さらしをおこなっていたと考えられる堅果類がまとまって出

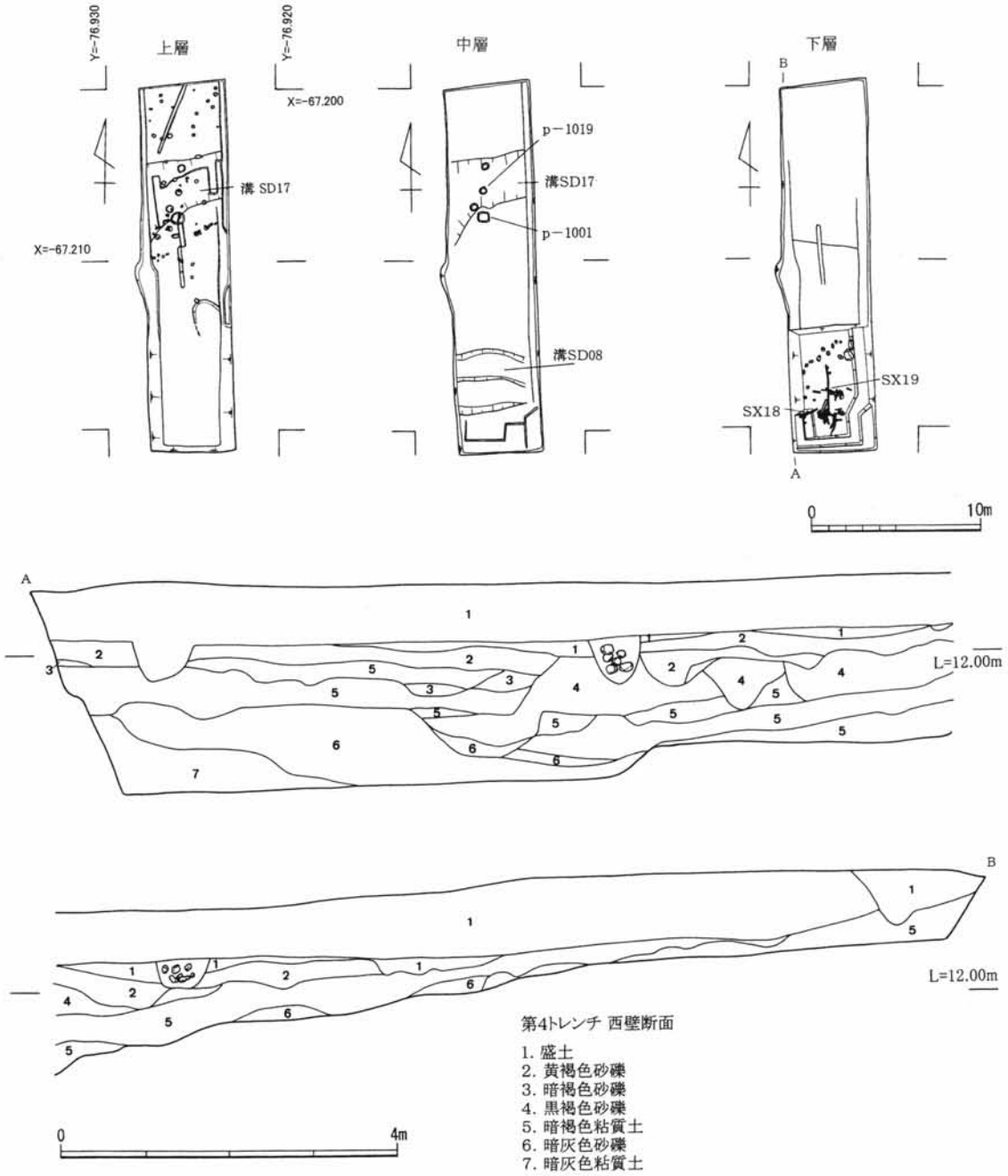



土坑SK10 東壁土層断面
1. 暗灰色・黄褐色粘質土
2. 黄褐色・灰褐色混じり粘質土
3. 暗灰色粘質土
4. 乳白色粘質土（ベース層）

3−2 トレンチ 谷状地形NR07 東壁断面
1. 黄褐色粘質土（盛土）
2. 褐色粘質土（盛土）
3. 暗褐色粘質土炭化物混じり（盛土）
4. 暗褐色粘質土　5. 灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土　7. 黄褐色砂礫
8. 黒灰色砂礫　9. 暗灰色粘質土
10. 暗灰色砂礫　11. 黒褐色砂礫
12. 褐色粘質土（シルト）
13. 黒褐色粘質砂礫
14. 黒灰色粘質土（シルト）
15. 黒灰色粘質砂礫　16. 黒灰色砂礫
17. 黒灰色砂礫　18. 乳灰色粘質土（ベース）
19. 黄灰色砂礫（ベース）

1. 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土混じり）　2. 黄褐色粘質土（暗褐色粘質土混り）
3. 褐色粘質土　4. 黄褐色粘質土（乳灰色粘質土混じり）
5. 黒褐色粘質土（黄褐色・乳灰色粘質土混じり）
6. 褐色粘質土（黄褐色砂粒・砂礫混じり）　7. 黒褐色粘質土
8. 乳灰色粘質土（黄色褐色粘質土混じり）　9. 暗褐色粘質土　10.褐色粘質土
11.暗褐色粘質土　12. 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土混じり）
13. 黄褐色粘質土（暗褐色粘質土混じり）　14. 褐色粘質土
15. 乳灰色粘質土（ベース）

第12図　第３－２トレンチ遺構断面図




第13図　第４トレンチ実測図

土した。

**土器溜まりＳＸ09**　谷状地形ＮＲ07の南岸土手部が幅約1.4ｍでテラス状の二段になっており、ここに南に想定される集落から６ｍにわたって土器を捨てたと考えられる場所である。

**土坑ＳＫ10**　谷状地形ＮＲ07の土手部を整地した埋め土の一部で、ＳＸ09の西に位置する。直径約３ｍの範囲に黒色の粘質土層を検出した。

**第３－３トレンチ**（第10図）

南側で地山の肩部を検出し北に向かって下がる谷状地形（ＮＲ07）の延長を検出した。

**第４トレンチ**（第13図）

調査地の全体が黒褐色の粘質土に覆われており、ベースの黄褐色土までの掘削を行った段階で初めて遺構の輪郭を確認する事ができた。奈良から平安時代にかけての２条の溝（ＳＤ08・17）・柱穴や古墳時代に杭や板を使用した護岸施設（ＳＸ18・19）などを検出した。

**溝ＳＤ08**　調査地の南よりで検出した。西から東に流れる。幅約３ｍ、深さ約0.5mの東西溝で、砂と礫によって埋まっていた。溝内からは須恵器杯Ｂ、杯Ａ、軒丸瓦、板などが出土した。

**溝ＳＤ17**　調査地の北よりで検出した。北東から南西に流れる。幅約３ｍ、深さ約0.5mの溝で、砂と礫によって埋まっていた。溝内からは土器では須恵器杯Ｂ、杯Ａ、皿Ａ、稜椀、墨書土器が、木製品では人形、鳥形、斎串、荷札と瓦類などが出土した。

**護岸施設**（ＳＸ18・19）　調査地の南端、深さ約1.5～2.0mで検出した。杭と板によって西側を土手として構築されている。周辺には直径が１ｍ近い岩が流れていることから宮川の旧流路に伴う土手として造成されたものと考えられる。埋土中から古墳時代の土師器高杯・甕などが出土した。

### ３．出土遺物（第14～26図）

第１トレンチでは、包含層の中からは、弥生土器（高杯・甕）や石器（削器）、古墳時代～平安時代の土師器・須恵器（杯・甕・高杯・皿）、さらに格子目叩きをもつ布目瓦などが出土した。竪穴式住居跡（ＳＨ03）から弥生時代後期の甕・台付壺・高杯および石器（敲石）が出土した。掘立柱建物跡の柱堀形内から平安時代の土師器・須恵器の破片が出土した。

第２トレンチでは、竪穴式住居跡ＳＨ04から、弥生時代のミニチュア土器、土坑（ＳＫ201）から布目瓦、陶器が出土した。

第３トレンチでは、包含層の中から弥生時代から、鎌倉時代の遺物が出土した。土坑内からは多くの布目瓦とともに平安時代の糸切り底の椀や黒色土器が出土した。瓦や土器の中には焼けひずんだ土器や瓦も含まれている。谷状地形（ＮＲ07）からは、縄文時代前期の土器・弥生時代中期の土器が出土した。一番最後に埋まった土層からは古墳時代前期の土器が出土している。また堰状遺構（ＳＸ15）周辺では堅果類（トチ・モモ・シイ）の皮や種とともに木製容器の槽・有頭棒・板や杭などが多数出土した。土器溜まり（ＳＸ09）からは、弥生時代中期から後期、古墳時代にかけての土器が土手にゴミを捨てるように層を成していた。土坑（ＳＫ10）からは、弥生土器に混じって縄文土器も出土した。

第４トレンチでは、包含層の中から平安時代の糸切り底の椀や黒色土器・布目瓦などが出土した。溝（ＳＤ08・17）・柱穴からは須恵器の杯蓋・杯・稜椀・壺・甕、土師器の杯などとともに布目瓦などが出土した。護岸施設（ＳＸ18・19）の周辺からは古墳時代の土師器高杯・甕などが出土した。

**第１トレンチ**

遺構内では、竪穴式住居跡（ＳＨ03）、土坑、掘立柱建物跡などから遺物の出土がみられる。掘立柱建物跡の柱穴内からは、図示できるものがなく、ここでは竪穴式住居跡と土坑（ＳＫ104）か

ら出土したものについて述べる。

**竪穴式住居跡ＳＨ03**　１～９・23は、竪穴式住居跡ＳＨ03から出土した。上層の埋土中から須恵器杯が出土したが、基本的に弥生時代後期の資料群である。１～８は甕である。肥厚させた口縁端部に２～３条の擬凹線が施されたもの(１～３)、凹線はもたないが面を形成するもの(６～８)、さらに後期の土器の特徴をよく示すもので、帯状の広い面が形成された口縁端部に沈線や擬凹線が施されたもの(４・５)などがある。いずれも全周の４分の１に達しない断片で、復元径は15.5～18cm内外を測る。９は蓋である。つまみ部の径は６cm、下端部の径は14.2cmを測る。11～14は壺底部断片である。11は穿孔がみられ、甕または甑とみられる。12～14は甕または壺である。底部径は11から14の順に3.0・4.4・6.0・6.6cmを測る。15と16は高杯で、杯部の口縁端部である。15は推定口径34cmを測る。17は壺か鉢の台部である。底径は10.2cmである。18は器台の下部である。底径は9.8cmを測る。19～21は高杯の脚柱部である。21は磨滅が著しいが、19と20には外面に細かなヘラミガキ痕をとどめる。これら弥生土器の特徴から畿内第Ｖ様式前半から中頃に併行するものであろう。

22と23は、住居の上面から出土した須恵器杯蓋である。22は口径11.9cm、器高3.4cmを測り、およその形式・年代はＴＫ209型式、６世紀末から７世紀初頭である。23は欠損しているがつまみみをもつもので、口径16.2cm、残存器高3.8cmである。形式・年代は８世紀とみられる。これら２点は混入したものといえる。

24は、土坑(ＳＫ104)から出土した中国製青磁椀の体部下半から底部の断片である。底径6.8cmを測る。

**第２トレンチ**

**竪穴式住居跡ＳＨ04**　10は小型(ミニチュア)の蓋形土器である。つまみ部の径2.2cm、下端部の径6.2cmである。

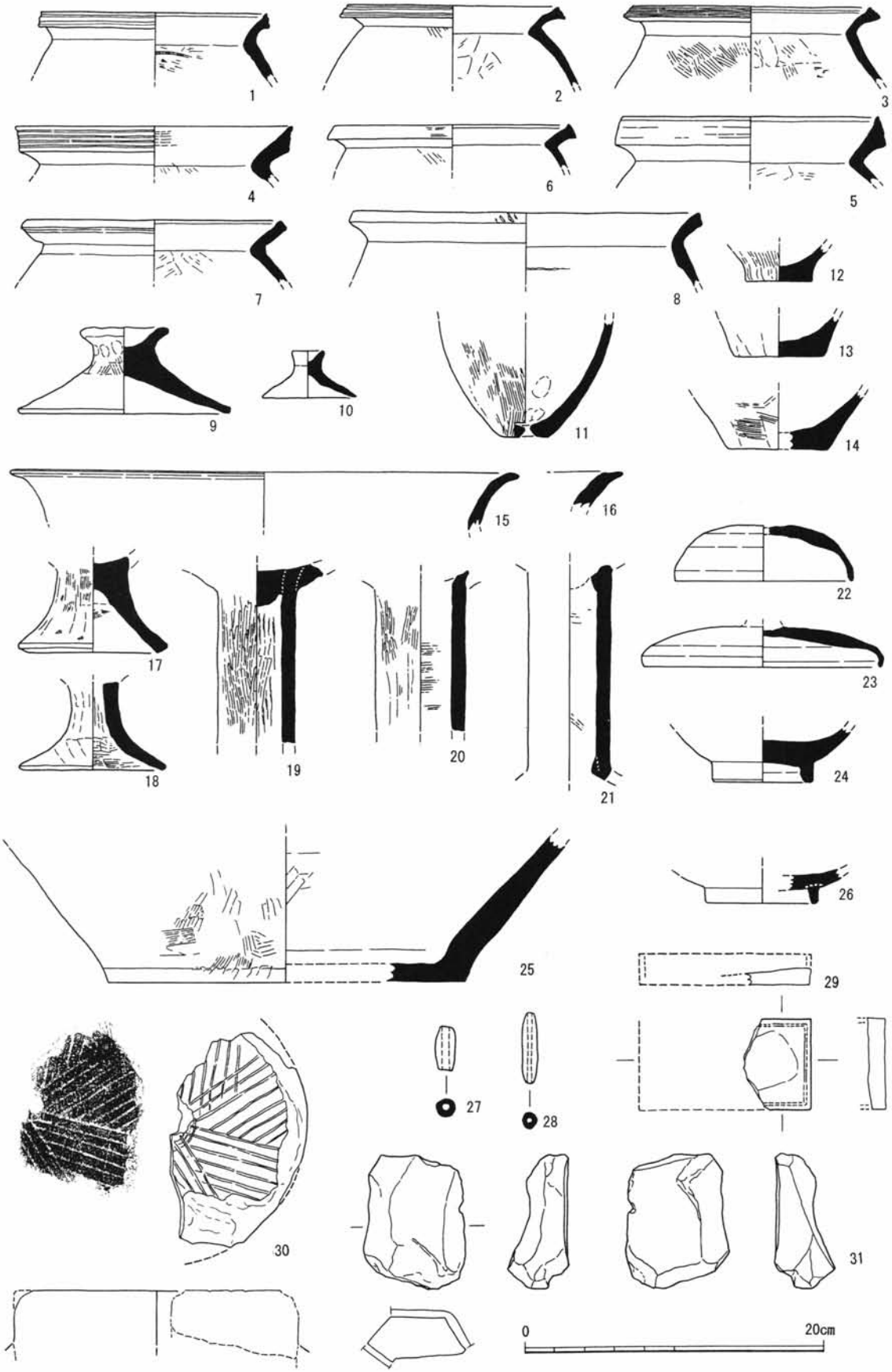
**土坑ＳＫ201**　25～37 は土坑ＳＫ201中から出土したものである。

25は越前焼の壺で、体部下半～底部の断片である。底部径は24cmを測る。26は中国製陶磁器椀の底部断片である。底部径は7.6cmである。27と28は管状土錘である。重さは27が4.7g、28が4.9gを測る。29は頁岩ないし粘板岩の硯の断片で、陸(摺り面)が確認される。30は石臼片である。31は砂岩製の砥石である。表裏面および側縁部に滑らかな砥面が形成されている。

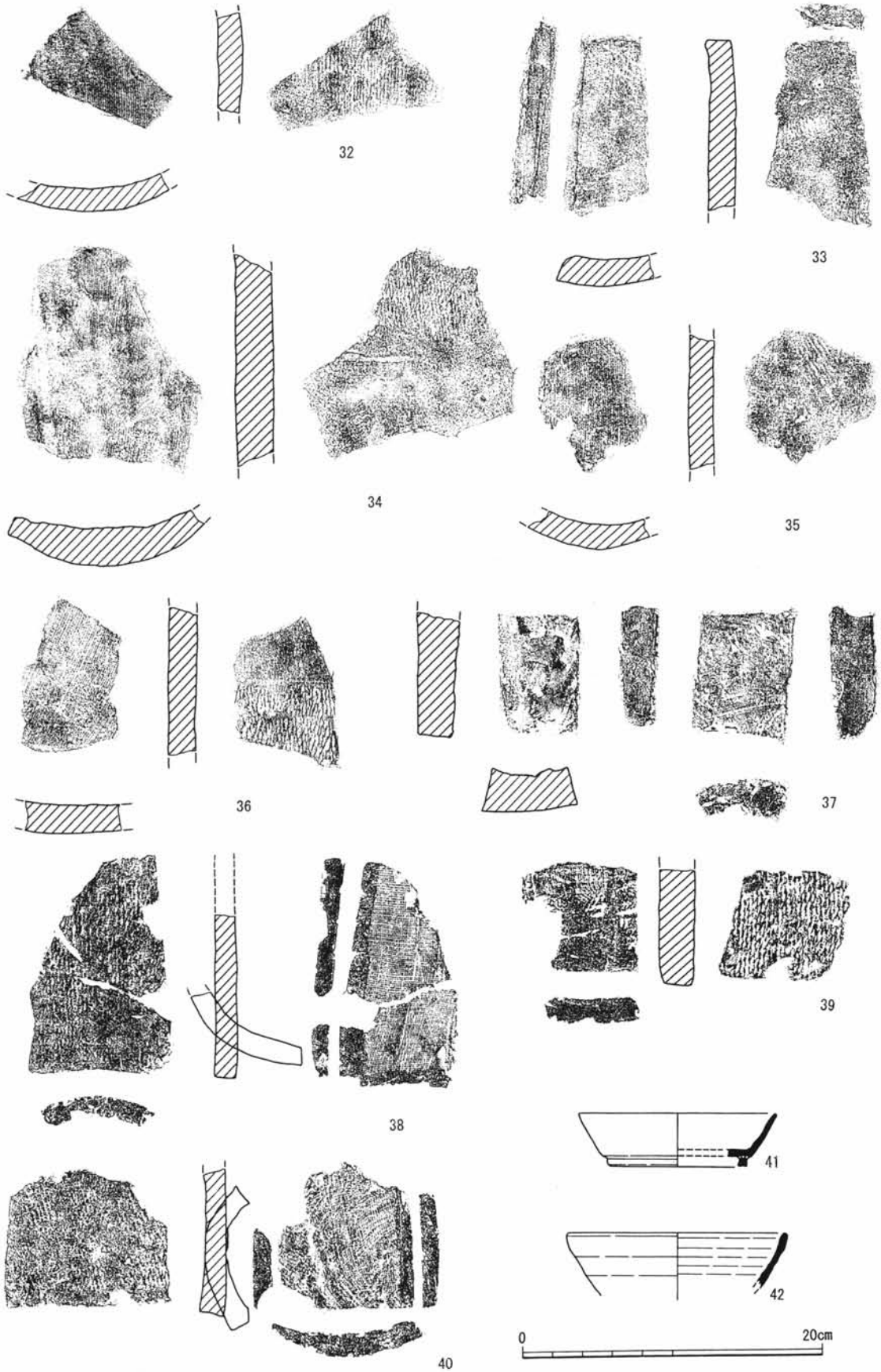
32～37は大小の布目瓦の断片である。種類はすべて平瓦で、凹面には布目圧痕、凸面側には縄目たたき痕が明瞭に認められる。時期は奈良～平安時代である。

**第３トレンチ**

**粘土採掘坑ＳＫ16**　38は丸瓦。凸面縄タタキ、凹面布目で端部内面にヘラケズリを施し暗茶灰色を呈す。残存長10.8cm、器厚1.5cmを測る。39は平瓦。凸面縄タタキ、凹面布目で明灰色を呈す。残存長7.5cm、器厚2.3cmを測る。40は小型の平瓦で熨斗瓦か。凸面縄タタキ、凹面布目で暗灰色を呈す。残存長10.0cm、幅9.8cm、器厚1.3～1.6cmを測る。41・42は杯Ｂである。41は口径13.1cm、器高3.5cmを測る。42は口径14.4cm、残存高3.9cmを測る。




第14図　出土遺物実測図（１）

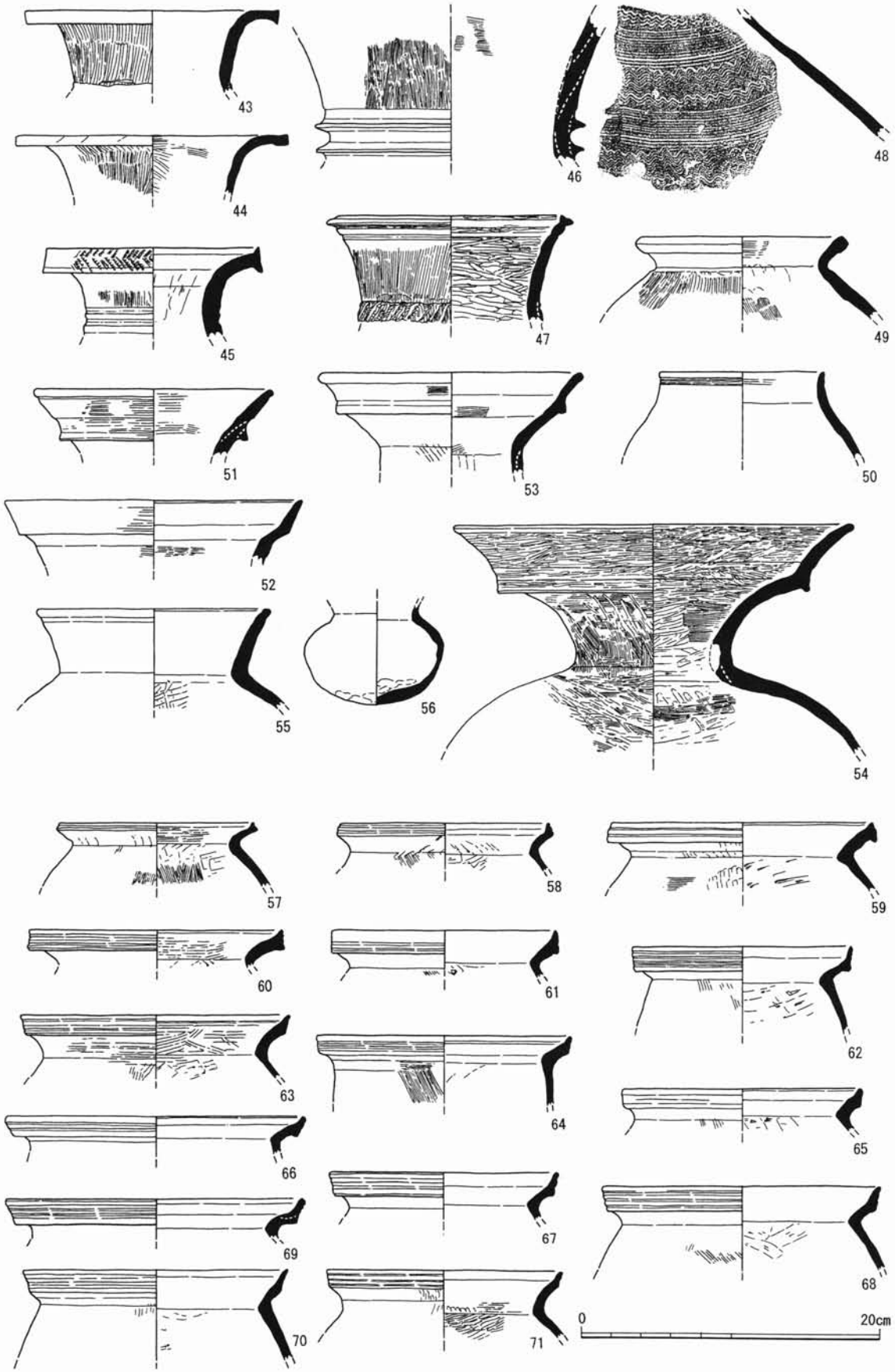



第15図　出土遺物実測図（2）

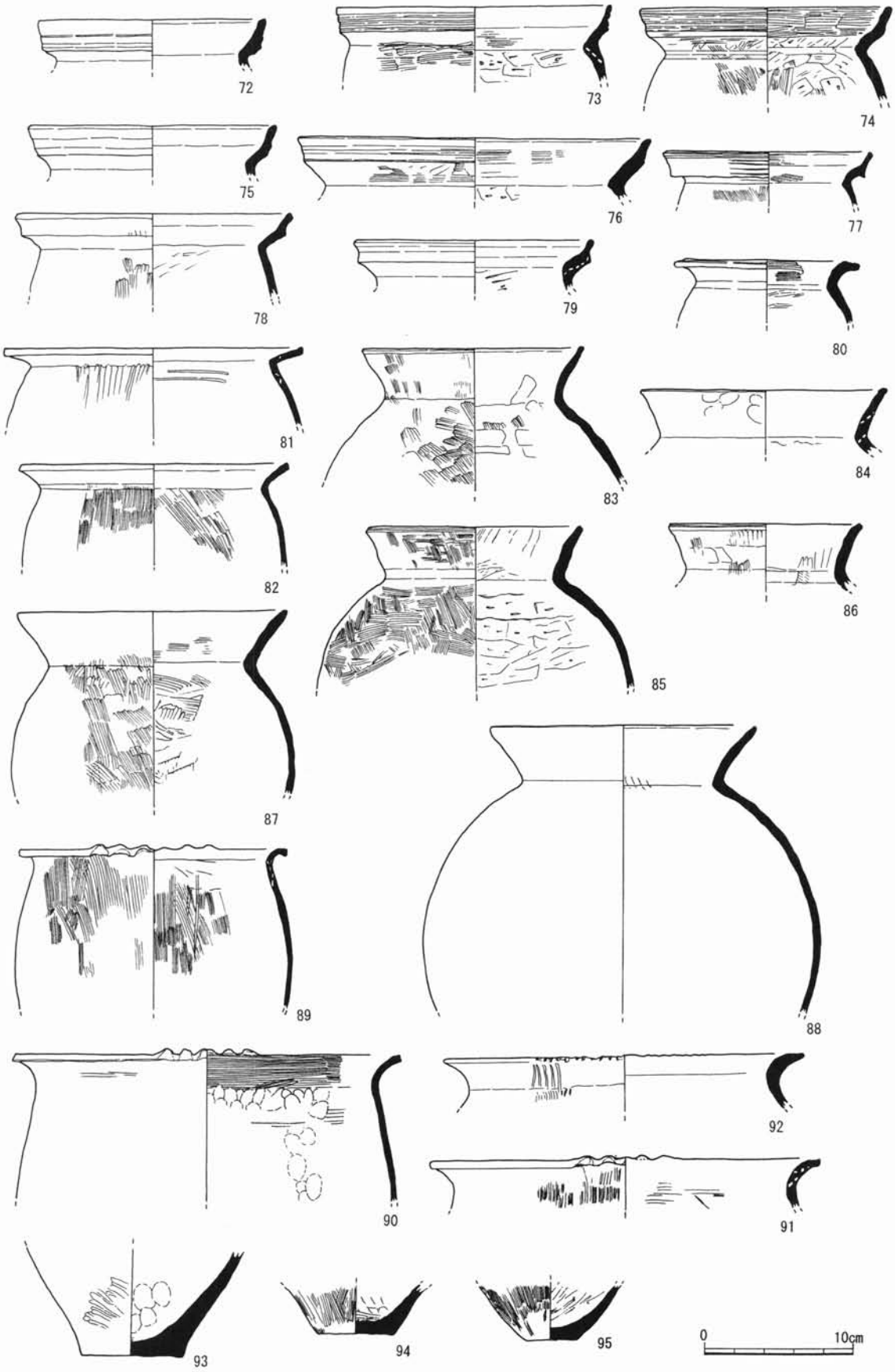
**谷状地形ＮＲ07**　埋土内より縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、木製品、植物遺体などが出土している。縄文土器と木製品については別項でまとめる。

43～45は、弥生土器広口壺で、内面横方向のハケ目痕、外面縦方向のハケ調整、43は頸部に粘土帯貼付け痕が認められ暗橙灰色を呈する。口径16.8cm、残存高5.4cmを測る。44は内面灰白色外面黄灰色を呈する。口径18.2cm、残存高5.1cmを測る。45は頸部に凹線を施し口縁端面に櫛状工具による刺突で綾杉文を施している。淡褐色を呈し、口径18.2cm、残存高5.1cmを測る。46は壺頸部である。２帯の貼付け凸帯を施している。内外面ハケメ調整、暗灰色を呈し、頸部径16.1cm、残存高9.6cmを測る。47は頸部に貼付け凸帯を口縁端部下段に二条の凹線文を施す。内面ナデの後横方向のヘラミガキで外面縦方向のハケ調整を施す。内外面とも褐色を呈し、口径15.1cm、残存高6.8cmを測る。48は壺の肩部片である。14本の櫛による波状文３帯、直線文２帯が認められる。内面淡灰褐色、外面暗茶褐色を呈する。49は「く」の字口縁に内面横ハケ、体部の内外面縦方向のハケメ調整で内面黄橙色、外面灰黄褐色を呈する。口径13.0cm、残存高5.4cmを測る。50は無頸壺で口縁部外面に３条の沈線を施し、内外面ともにぶい橙色を呈する。口径11.0cm、残存高5.8cmを測る。51～54は二重口縁壺である。51～53は口縁部の内外面とも横方向のハケ調整を施す。54は口縁部の内外面ともハケ調整の後、横方向のヘラミガキを施し、頸部は縦、体部で斜めのヘラミガキを施している。51は淡灰色を呈し、口径11.0cm、残存高5.8cmを測る。52は橙色を呈し、口径19.8cm、残存高4.3cmを測る。53はにぶい黄橙色を呈し、口径17.6cm、残存高6.7cmを測る。54は内面暗褐色～橙褐色、外面淡灰褐色を呈し、口径26.6cm、残存高15.3cmを測る。55は内面横方向のハケメでにぶい黄橙色、外面ナデ調整でにぶい橙色を呈する。口径15.4cm、残存高6.7cmを測る。56は小型丸底壺で、ＮＲ07の南側肩部から出土した。明茶褐色を呈し体部径9.4cm、残存高6.9cmを測る。57～79は、丹後系の二重口縁甕で、口縁部外面の擬凹線を特徴とする。口縁端面が断面ほぼ直角になるタイプＡ(57～61)、外開きになり上方につまみ上げるタイプＢ（62～76)、外面を強く押さえ擬凹線がほとんど消失するタイプＣ（77～79)に分類される。80～88は「く」の字口縁甕である。89～91は口縁端部を３か所一対で山形に隆起させる。口縁部内面横ハケ、体部内外面に縦方向のハケメを施す。92は口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施す。93～95は底部片である。内底面指押さえで外面ヘラミガキの壺(93)と内底面ヘラケズリで外面ハケ調整の甕(94・95)と考えられるものがある。96・97は口縁端面に擬凹線をもつ鉢もしくは高杯の杯部である。98は高杯もしくは台付き鉢の脚部で凹線文を施す。100～104は高杯、105は低脚高杯の脚部。108～110は蓋、106・107は脚台。111～116は底部に穿孔をもつ。

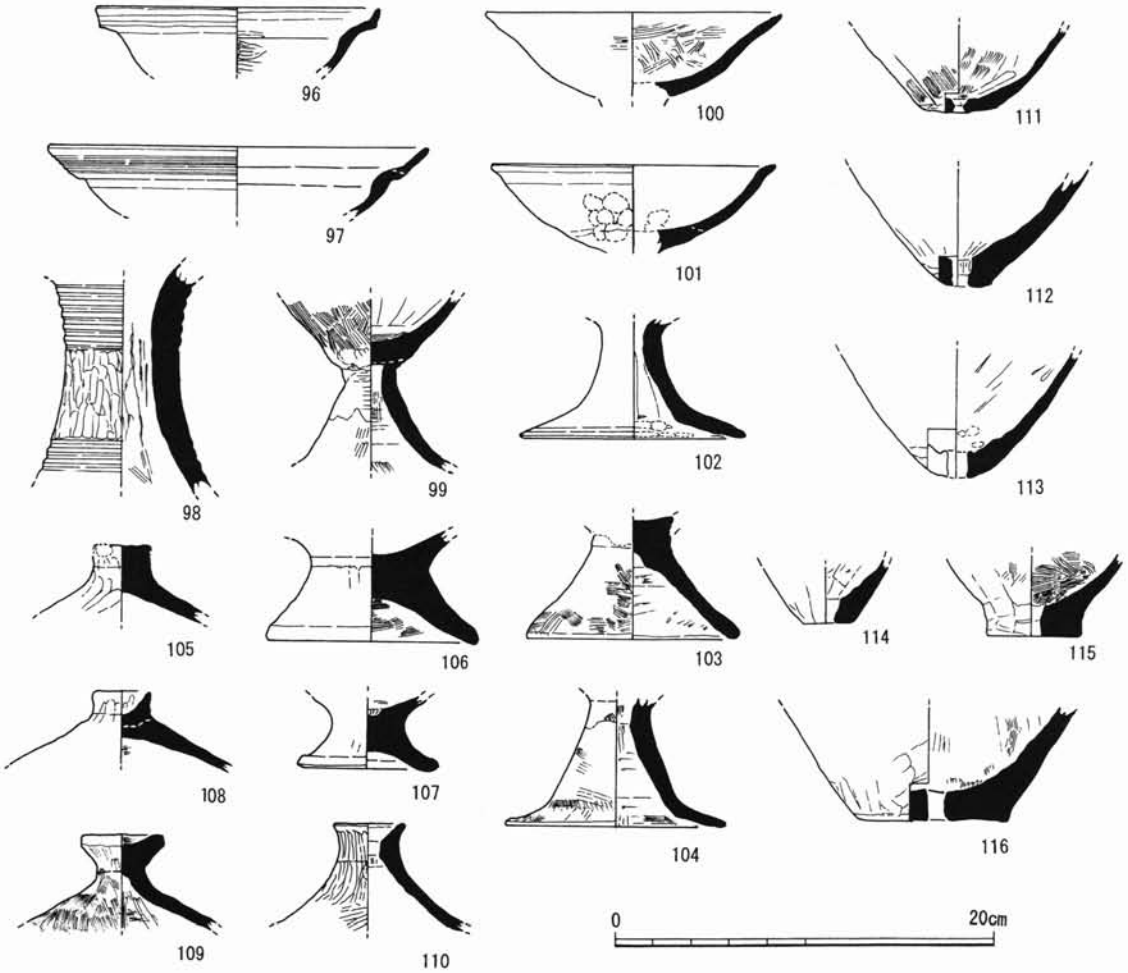
**ピット・包含層**　数多くの布目瓦や黒色土器、陶磁器、弥生土器などが出土した。117はピット内出土で丸瓦。凸面縄タタキ、凹面布目で淡灰褐色を呈す。残存長6.9cm、器厚1.4cmを測る。118は包含層出土で平瓦。凸面平行タタキ、凹面布目に糸切り痕で青灰色を呈す。残存長14.0cm、器厚1.9～2.2cmを測る。119は包含層出土で平瓦。凸面縄タタキ、凹面布目に糸切り痕で淡橙褐色を呈す。残存長8.0cm、器厚1.5cmを測る。120は包含層出土で平瓦。凸面平行タタキ、凹面布目に糸切り痕で黄灰褐色を呈す。残存長7.3cm、器厚1.8cmを測る。121は包含層出土で須恵質の




第16図　出土遺物実測図（3）




第17図　出土遺物実測図（４）




第18図　出土遺物実測図(５)

平瓦。凸面縄タタキで青灰色、凹面布目で暗灰色を呈す。残存長7.1cm、器厚1.0～1.1cmを測る。122は包含層出土の丸瓦で玉縁部。凸面ナデ、凹面ナデ・ケズリで灰褐色を呈す。残存長7.5cm、器厚2.0cmを測る。

123は、３－２トレンチＰ740出土の染付椀。底径4.8cm、残存高1.8cmを測る。124は３－２トレンチ包含層出土の青磁椀。底径5.7cm、残存高2.8cmを測る。125・126は３－２トレンチ包含層出土の黒色土器椀。125は内外面ミガキ調整で底部糸切り。底径7.0cm、残存高2.0cmを測る。126は内外面ミガキ調整で高台径7.2cm、残存高1.8cmを測る。127は３－２トレンチＰ725出土の唐津皿。淡赤褐色を呈し、内底面に離れ砂痕が残る。底径5.0cm、残存高1.9cmを測る。128は3－２トレンチＰ848出土の丹波すり鉢。淡褐色を呈し内面に１本ヘラ引き。底径11.2cm、残存高6.9cmを測る。129は包含層出土の弥生土器甕。口縁部外面に擬凹線、淡褐色を呈し。口径19cm、残存高4.3cmを測る。

**土器溜まりＳＸ09**　130～141がＳＸ09出土である。弥生時代後期の壺(130・131)、甕(132～137)、高杯(138～141)が出土している。

130は頸部から上方に開く二重口縁の外面に擬凹線。淡褐色を呈し、口径14.6cm、残存高5.2cmを測る。131は、頸部から上方に開く口縁外面に擬凹線。暗褐色を呈し、口径15.9cm、残存高

2.2cmを測る。132～135は頸部から上方に直線的に開く「く」の字口縁を持つ甕。132は口縁内外面は横方向のハケ目調整、体部内外面に縦方向のハケ目調整を施す。暗灰茶色を呈し、口径15.8cm、残存高4.6cmを測る。133の口縁内外面は横方向のナデ調整、体部内面に縦方向のケズリを施す。淡褐色を呈し、口径14.6cm、残存高4.2cmを測る。134の口縁内外面は横方向のハケ目調整、体部内面縦方向のケズリ、外面に縦方向のハケ目調整を施す。淡灰茶褐色を呈し、口径14.8cm、残存高12cmを測る。135は大きく外方に開き端部に面を持つ口縁部、口縁内外面はナデ調整、体部内面縦方向のケズリ、外面に縦方向のハケ目調整を施す。明灰褐色を呈し、口径24.6cm、残存高5.4cmを測る。136は口縁端部を２か所一対で山形に隆起させる。口径24.6cm、残存高5.4cmを測る。

**土坑ＳＫ10**　壺(142～144)、鉢(145)、甕(146～152)、高杯(153)などがある。

142は大きく開く口縁部の内面斜め方向のハケ調整の後上半を横ナデ、外面にハケ調整を施している。内面灰白色、外面黄灰色を呈し口径18.2cm、残存高5.1cmを測る。145は黄灰色を呈し口径15.2cm、残存高9.0cmを測る。甕は口縁部横ハケ、体部縦斜め方向のハケ調整を施す。153は淡黄褐色を呈し杯部の口径15.8cm、器高4.7cmを測る。

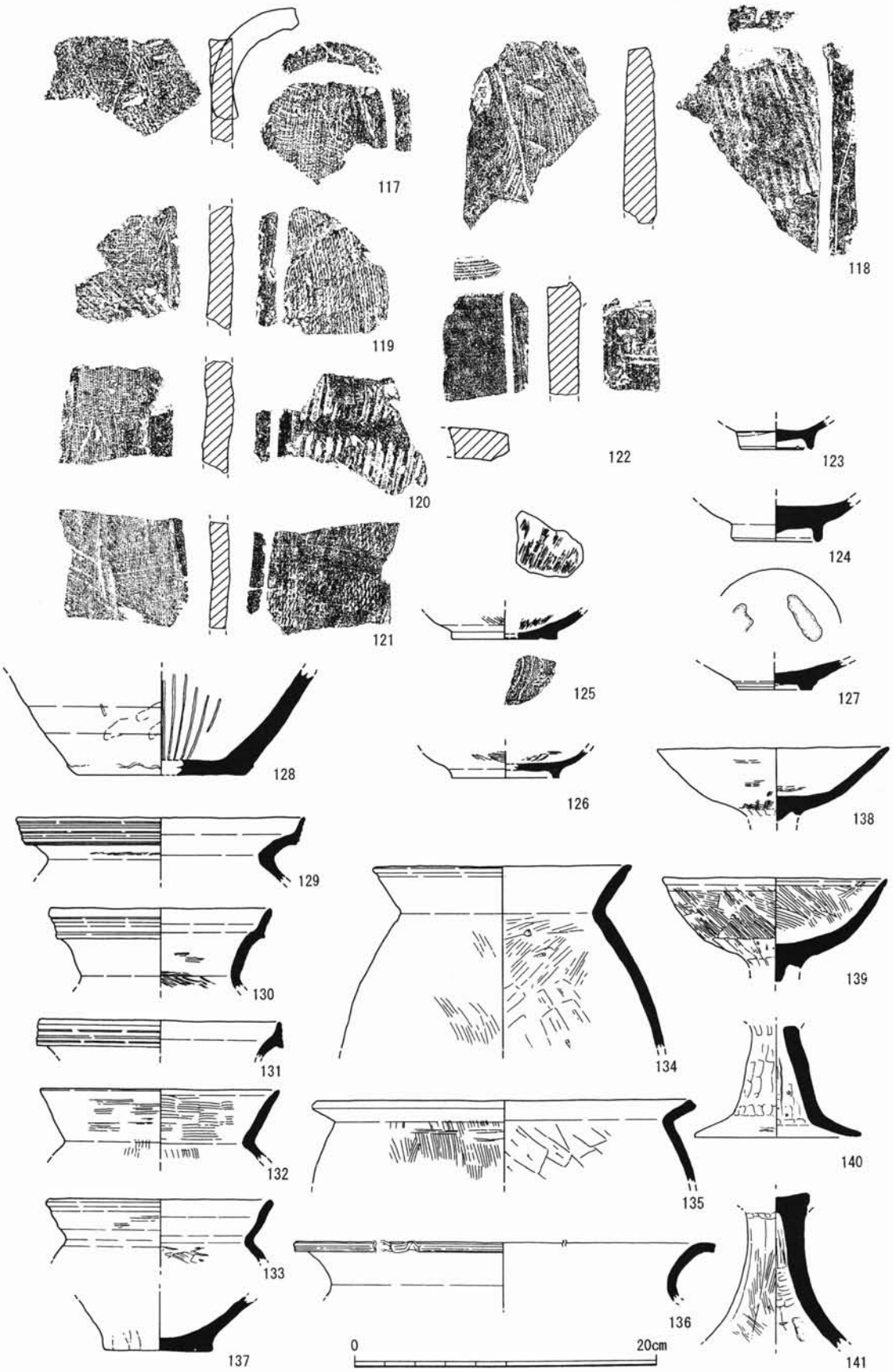
**第４トレンチ**

**溝ＳＤ08**　須恵器杯Ａ(154)・杯Ｂ(155)・皿Ｂ(156)、軒丸瓦(157)などが出土している。木製品については別項にまとめた。

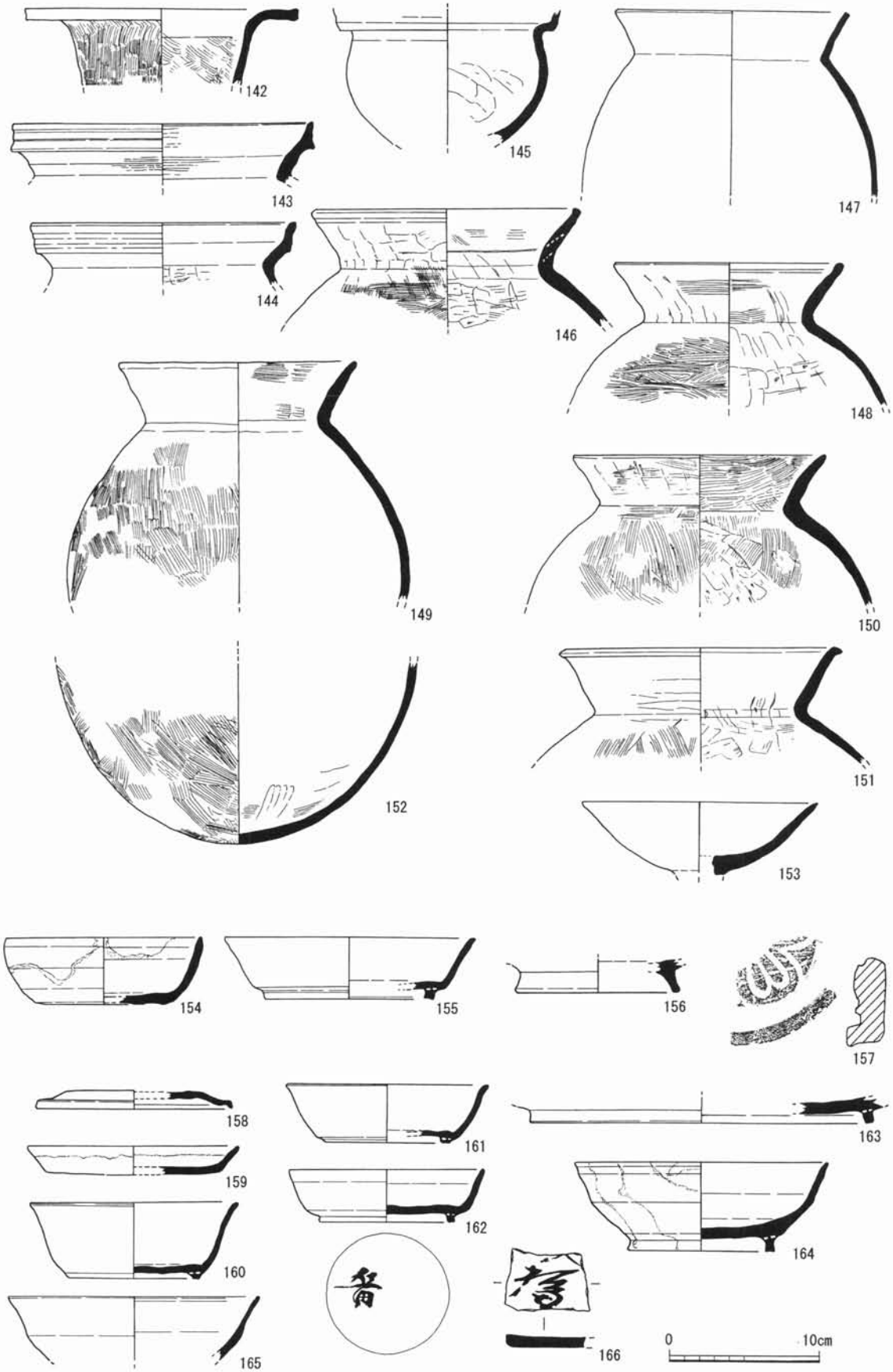
154は内湾ぎみの杯部を持つ。二次的な火を被っており内面が暗褐色、外面黒から暗褐色に変色している。口径13.0cm、器高4.5cmを測る。155は杯の底部から内による高台と外反する杯部からなり、内面灰白色、外面青灰色を呈する。口径16.6cm、器高4.1cmを測る。156は高台付き皿の高台部である。ＳＤ17上面出土遺物に全体の形状がわかる類例(168)がある。本品は焼成が悪く内面灰白色から青灰色、外面灰白色から赤褐色を呈し、断面に多量の炭素を吸着している。底径11.0cm、残存高2.3cmを測る。157は複弁蓮華文軒丸瓦であるが、周縁と蓮弁部のみの破片であり全体の形状をうかがう事ができない。復元径13.6cm、周縁の幅1.4cm、深さ0.9cm、瓦当の厚さ2.5cmを測る小振りである。瓦当の表現は肉彫りにならず溝彫になっており、周縁や蓮華が凸線の表現になっている。また乾燥時に付いたものか瓦当表面に布目が認められる。対応する弧文軒平瓦がＳＤ17上面の出土遺物にあるが、中央に一条の凹線が施され上下二条の凸表現をしている。これらの瓦の組み合わせは、周辺地域では出土が確認されていない。

**溝ＳＤ17**　須恵器杯蓋(158)、皿Ａ(159)、杯Ｂ(160～162)、皿Ｂと考えられるもの(163)、稜椀(164・165)、墨書土器(162・166)などが出土している。また、溝掘り方が確認される以前の調査段階で地区名を付して取り上げた遺物に溝内遺物と考えられる一群(167～179)がある。木製品については別項にまとめた。

158は宝珠を欠いている。内面に広く墨痕があり転用硯として使用されていた。口径13.2cm、残存高1.2cmを測る。159は焼成時の自然釉が付着しており口径14.1cm、器高1.9cmを測る。160は内外面灰色を呈し口径13.8cm、器高5.1cmを測る。161は内外面青灰色を呈し口径13.4cm、器高




第19図　出土遺物実測図（6）




第20図　出土遺物実測図７

3.8cmを測る。162は底部外面に「丘田」の文字が認められる墨書土器である。内面灰色、外面暗灰色を呈し口径13.0cm、器高3.5cmを測る。163は高台付きの底部片で高台径23.0cm、残存高1.7cmを測る大型品である。高台や器壁の厚さから壺甕でなく皿と判断した。164は焼成時の自然釉が付着しており内面茶灰色、外面黒色を呈し口径17.0cm、器高5.9cmを測る。165は焼成があまく内面灰白色、外面青灰色を呈し、口径16.8cm、残存高4.3cmを測る。166は4.2×5.7cmの杯または皿の底部片である。「□福」の文字が認められる墨書土器である。福の上に「人」のはねが認められることから「大」の可能性があり吉祥句かと考えられる。

**ＳＤ17上面出土遺物**　須恵器杯Ａ(167)、皿Ｂ(168)、蓋(169～172)杯Ｂ(173～178)、稜椀(179)などがある。

167は焼成時に火ダスキを施している。内外灰色を呈し口径12.8cm、器高3.6cmを測る。168は器高の約半分を高台が占める。内外灰色を呈し口径17.2cm、器高4.65cmを測る。169は宝珠つまみ部片、170～172は宝珠つまみを欠く。170は内面暗灰色、外面灰白色を呈し口径13.6cm、残存高2.0cmを測る。171は内外面灰色を呈し口径17.6cm、残存高2.7cmを測る。172は内外面暗灰色を呈し口径16.6cm、残存高1.1cmを測る。173は内外面灰色を呈し口径11.7cm、器高5.3cmを測る口径に比して器高の高い器種である。174は内面灰白色、外面灰色を呈し口径13.0cm、器高3.6cmを測る。175は内外面青灰色を呈し口径13.4cm、器高4.25cmを測る。176・177は内外面灰色を呈し口径14.0cm、器高3.5cmを測る。178は内外面灰白色を呈し口径14.4cm、器高4.1cmを測る。

包含層や建物としてまとまらないピットの中などからの出土遺物として、Ｐ－1019から土師器皿(181)、Ｐ－1001から須恵器杯(180)、包含層中から輪状つまみを持つ須恵器蓋(182)、同蓋(183)、杯Ｂ(184～186)、稜椀(187～189)、壺(190・191)、土師器皿(192)、糸切りの底をもつ須恵器椀(193)、土師器甕(194・195)などがある。

また、古墳時代の須恵器杯蓋(196・197)、砂目をもつ唐津皿(198)、丹波すり鉢(199)、土錘(200)がある。

184は内面全体に黒茶色漆の付着が認められ、漆塗り作業に使用されたと考えられる。土器は暗青灰色を呈し口径14.2cm、器高3.7cmを測る。

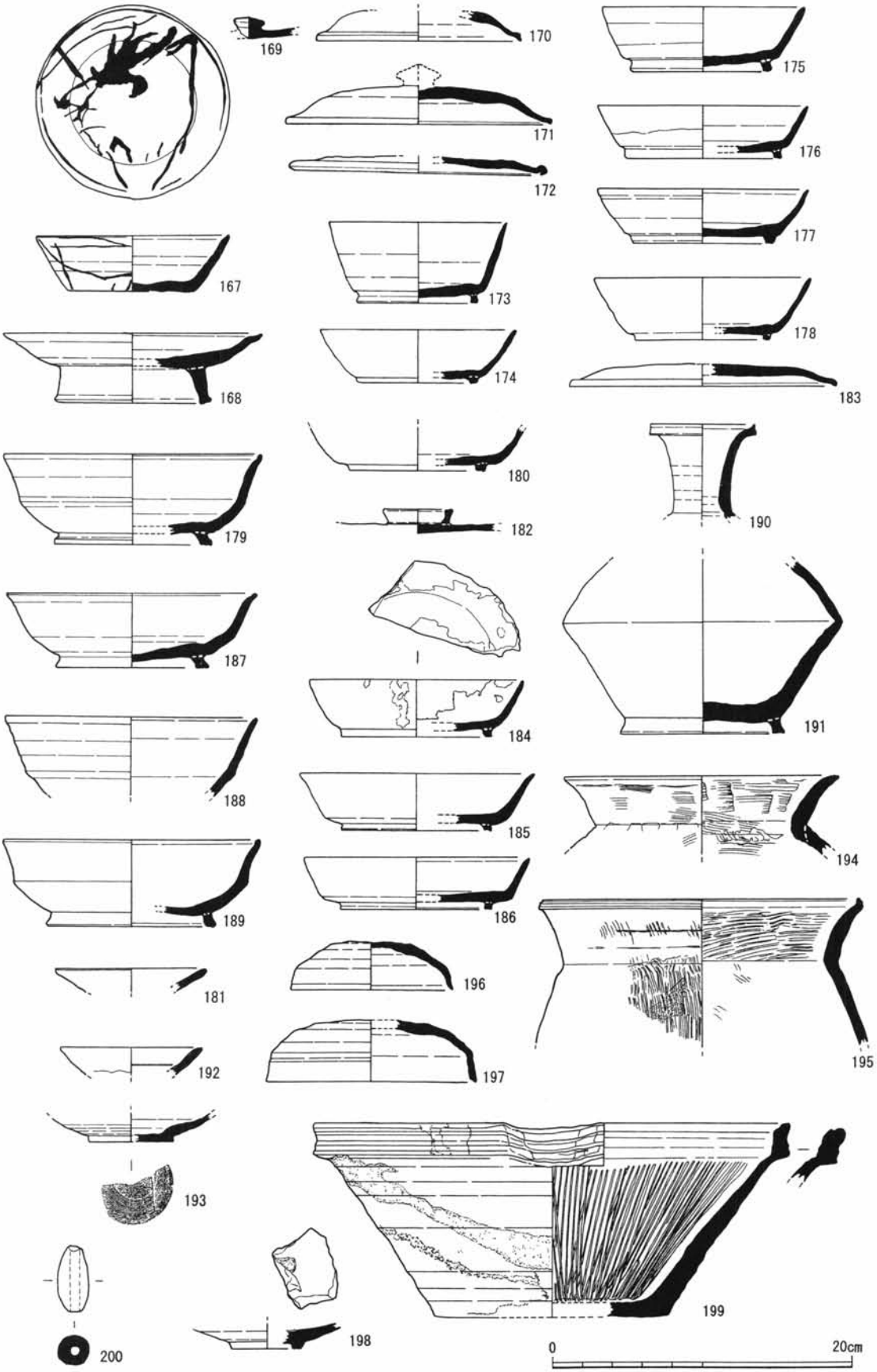
瓦では丸瓦と軒平瓦、平瓦がある。204は弧文軒平瓦である。凹面に布目、凸面に約１cm角の格子目タタキを施す。瓦当面は中央に一条の凹線を施し上下二段の凸線としている。瓦当面には乾燥時に付いたと思われる布目が認められる。にぶい橙色を呈し、厚さ3.0cmを測る。

瓦のタタキ目には縄タタキ(207・208)、格子タタキがあり、格子のタタキ板にも複数の種類がある。203・204などの１cm角の格子目や205・206などの２cm角の格子目などがある。

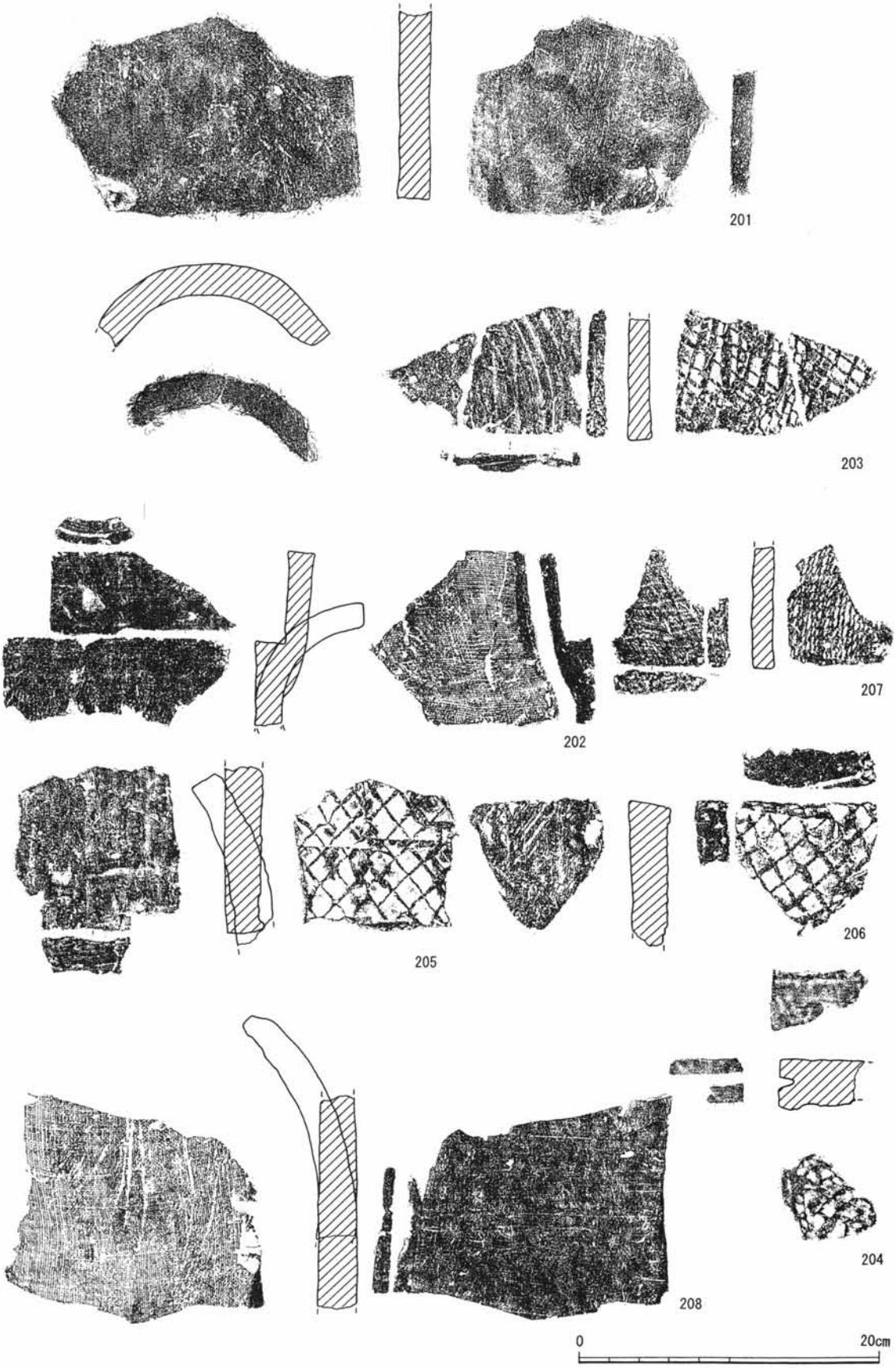
**縄文土器**(第23図)

縄文土器は主に第３トレンチの谷状地形ＮＲ07より出土しており、土器片で104点を数える。時期的には後期～晩期にわたる。

焼成は概ね良好である。色調は灰黄褐色・黒褐色・にぶい黄橙色といった色名で表現されるものが主体を占めている。胎土には白色の砂粒が普遍的に見られ、砂粒の円磨度が比較的高い。角




第21図　出土遺物実測図（８）




第22図　出土遺物実測図（9）

閃石は見られない。調整手法はナデが多いが、「細密条痕」やケズリもある程度見られる。

**有文土器**

有文土器は土器片で25点出土している。器形、文様によって６つに分類した。

**第１類土器**（１～５）

沈線で直線的・曲線的区画文を描き、縄文を充填する土器。１は波状口縁の波頂部で内外面ともにナデ調整。１～４の縄文の撚りの方向はＲＬで無文部はナデ調整だが、５はＲで無文部をケズリ調整している。灰白色。１・３～５は中津式に比定できる。２は水平口縁であり、口縁部内面がやや肥厚している。中津式もしくは縁帯文土器か。

**第２類土器**（６）

沈線で直線的・曲線的文様を描く土器。１点のみである。磨滅著しい。中津式か。

**第３類土器**（７～10）

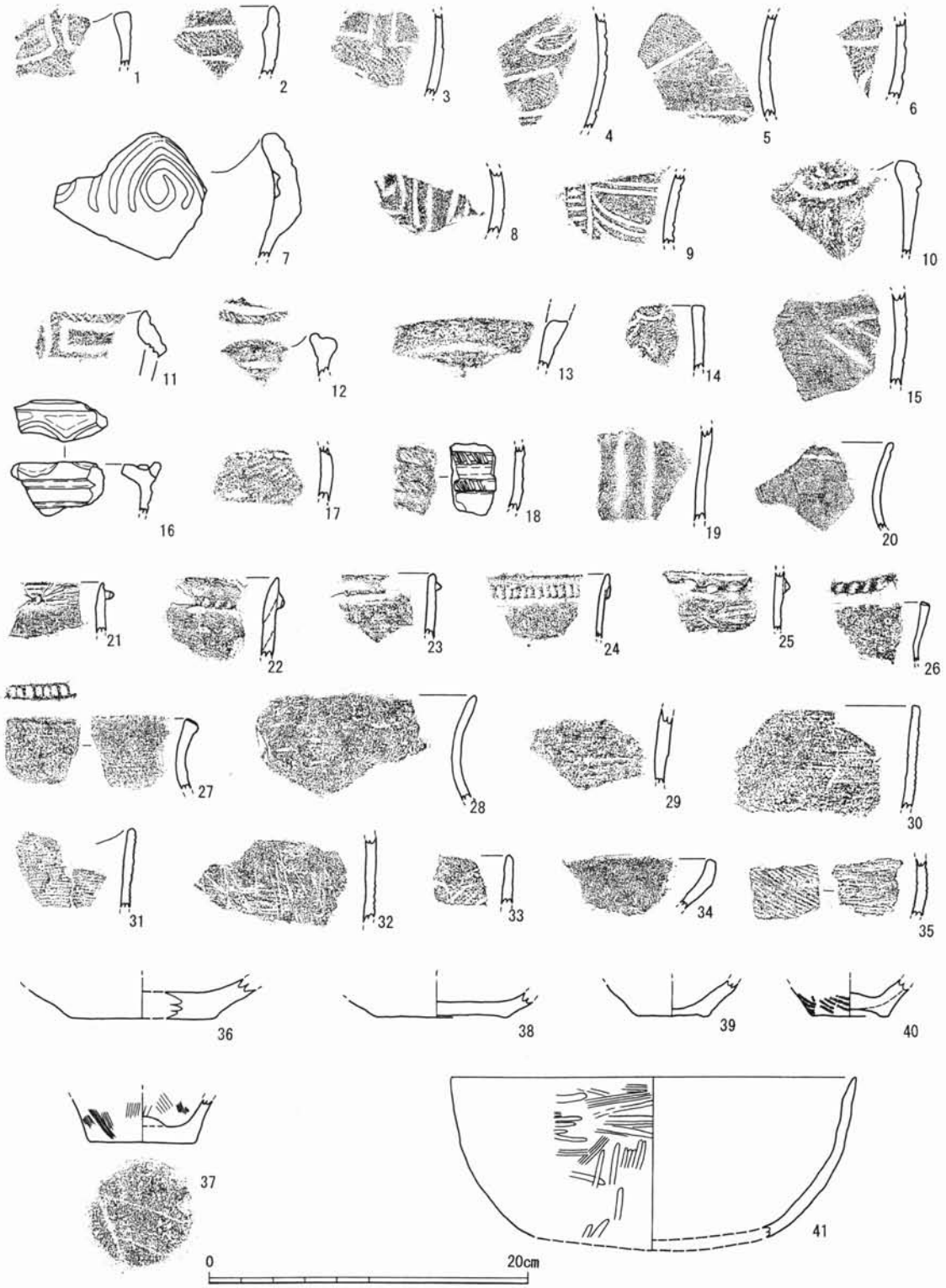
縁帯文土器で、口縁部は肥厚し、沈線をいくつかの単位で施し波状口縁を呈す。胴部は沈線で複雑なモチーフを描く。７は、渦巻文と弧線文の組み合わせを文様の主体として口縁部に施す。口縁内面中央部には楕円形刺突が施される。焼成は不良で非常にもろい。布勢式～津雲Ａ式の間と考えられる。８は入り組み文の周囲を方形に区画する文様に復原できる。芥川遺跡出土縄文土器No.13・15の胴部モチーフの一部に類似する。布勢式か。９は外反する器形で、梯子状の沈線文にそれぞれ３条の直線文・弧線文を組み合わせており、小森岡遺跡出土の縄文土器No.237のモチーフに類似する。福田ＫⅡ式～布勢式か。10は口縁部に３条の弧線文を施し、口頸部には弧線文より垂下する２条の沈線と区画文がみられる。内外面ともナデ調整が施される。北白川上層式１～２期か。

**第４類土器**（11～13）

縁帯文土器で口縁部ないし口唇部にＲＬの縄文を施し、沈線が横位に走る。内外面ともナデ調整。11は「く」の字形に屈曲する口縁部であり、長方形の沈線文を施す。縄文が施されるが、沈線区画内及び沈線下部ではナデ消されている。北白川上層式１～２期か。12は波状口縁の波頂部であり、沈線を挟み口唇部内面に縄文が施される。また口縁部内面にも沈線が施される。13は口頸部と考えられ、一条の横走沈線が施される。磨滅が著しく調整不明。灰白色。

**第５類土器**（14～20）

上記の４類とは形態・文様構成を異にし、時期が正確に比定できない土器片をまとめた。14は弧線文より２条の沈線がそれぞれ斜位に走る。口唇部は丁寧に面取りされており、内面はナデ調整、外面には圧痕が見られる。明赤褐色を呈する。15は３本の浅い沈線による区画文が描かれる。16は三角形に張り出した部分（以下凸部）と凹んだ部分が交互に連続する肥厚した小波状口縁部を呈する。凸部の口縁上面にはその形状に沿う形で三角形の凹みが作られる。丁寧なナデ調整。類例を発見しえない。17は、ＬＲの縄文を地文とする胴部で、沈線内に刺突が施されている。18は２条の浅い凹線内に斜位の刻み目が見られる。ナデ調整。19は浅い沈線が２条縦位に走る。20は反時計回りの押引文を施す。




第23図　出土遺物実測図(10)

1～3・5・6・8・9・11・12・15～27・30～32・34～36・38・39・41：ＮＲ07
4：ＳＸ18　7・13・37：Ｈ－12　10：Ｇ－11　14・28：ＳＸ9　29・40：ＳＫ10

**第６類土器**(21～25)

突帯文土器。口唇部よりやや下がった所に刻みを有する突帯が付く。21では突帯の直上に一条の横走沈線が施される。丁寧なナデ調整。暗赤褐色。25は突帯に棒状工具による深い押捺が施される。

**無文土器**

**無文深鉢**(26～35)

土器片で73点出土している。器形は外反するもの、直線的に立ち上がるもの、内湾するものがある。調整はナデのものが40点と半数以上を占め、細密条痕のものが14点、ケズリ仕上げが13点ある。条線地のものも２点出土している。ナデ・細密条痕は全器形に見られる調整技法だが、条線地は直線的に立ち上がる器形のみで見られる。口唇部に刻み、浅い押捺を施すもの(26・27)もみられる。

**無文浅鉢**(41)

１点のみ出土している。頸部が大きくカーブして立ち上がる器形である。丸底を呈すると考えられる。内面はナデ調整、外面は細密条痕及びミガキが施される。ミガキは器面全体ではなく、主に頸胴部に施される。口縁部は黒色、頸胴部は褐色を呈する。縁帯文期のものか。

**底部**(36～40)

５点出土している。平底と凹底のものがある。36は木の葉状圧痕が見られる。細密条痕が施され、内面中央には粘土瘤が貼り付けられている。凹底は底縁が高台状になっているもの(38・39)と底縁から中央に向かってドーム状に立ち上がるもの(40)がある。

(大本朋弥)

**木製品**(第24～26図)

ほとんどが第３トレンチの谷状地形ＮＲ07から出土している。弥生時代から古墳時代のものが中心である。律令期のものは第４トレンチの溝ＳＤ17からの出土が中心である。

１～５、13～16、19、22～26はＮＲ07からの出土である。６、９、10、12、18、20、21は第４トレンチのＳＤ17からの出土である。17はＳＤ08からの出土である。

１はＮＲ07内の堰状遺構ＳＸ15の下流で出土した。容器盤の未成品である。針葉樹の芯去り材を用い、木表側に脚部を削り出す途中までの半製品である。長さ41cm、幅22.9cm、厚さ19.6cmを測る。

２も同じくＳＸ15の下流で出土した。盤の未成品である。容器の内側を刳りぬく手法として火を用い，炭化した部分を削ぎ落とす方法をとっているが、底が抜けてしまい失敗作である。長さ39.2cm、幅25.7cm、厚さ8.2cmを測る。

３は農具鋤もしくは漁労具櫂の半成品である。広葉樹を用い、下方の刃部と上方の柄を削り出す途中の未成品である。長さ66.4cm、幅15.5cm、厚さ3.9cmを測る。

４は第３－３トレンチから出土した。通称石見型木製品である。頂部中央の切り込み、両側面から上下に向かってカーブをもっての削り出しを特徴とし、２か所の紐を通す穴をあけている。

下方は二次的な加工が認められ本来の製品の途中で切断されていると考えられる。本来古墳に樹立された埴輪名称からの呼称であるが、当製品は出土状況から古墳に樹立したものとは考えられない。長さ32.7cm、幅18.8cm、厚さ1.0cmを測る。年輪年代の鑑定結果は478年である。

5は矢板の先端部である。長さ65cm、幅18.7cm、厚さ2.1cmを測る。

6は鳥形木製品である。図の左端で頭部から肩部にかけ表現し、中央下部に両側から削り出して足を表現している。右半部が尾の表現となっている。長さ18cm、幅2.5cm、厚さ0.35cmを測る。

7は第4トレンチ包含層の出土で独楽形木製品である。高さ6.2cm、直径3.6cmを測る。

8はＳＤ08の出土である。板目取りで薄く割った木簡状の材である。残存長18.4cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測る。

9・10は斎串と考えられる。9は残存長9.8cm、幅1.35cm、厚さ0.6cmを測る。10は残存長14.6cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。

11は桶もしくは曲物の底板である。残存長10.9cm、残存幅3.25cm、厚さ0.7cmを測る。直径13cmに復元できる。

12は人形である。頭頂部を山形に削り顔から首にかけて細く削り込み、肩部で直角に切り落としている。手の表現は腰から脇の下に向かって切り込みを入れる事で表現し、足は股下に8㎜の幅を持たせ板の中央部を切り落として表現している。残存長12.3cm、幅2.6cm、厚さ0.5cmを測る。

13は先端部加工の針葉樹の板物である。残存長16.5cm、幅4.45cm、厚さ1.5cmを測る。

14は丸い棒状品である。先端部が丸く摩耗しており中位に紐ずれ状の摩耗が認められる。長さ28.2cm、最大幅5.9cm、厚さ2.3cmを測る。

15は組み具である。中央部分に刳り込み両端に2個一対の穴を穿つ。穴の中には桜の表皮を通し結束に使用している。長さ26.15cm、残存幅3.15cm、厚さ1.1cmを測る。

16は有頭棒である。断面カマボコ状を呈しており、織機の部材、緯経具と考えられる。残存長27.5cm、幅3.0cm、厚さ1.0cmを測る。

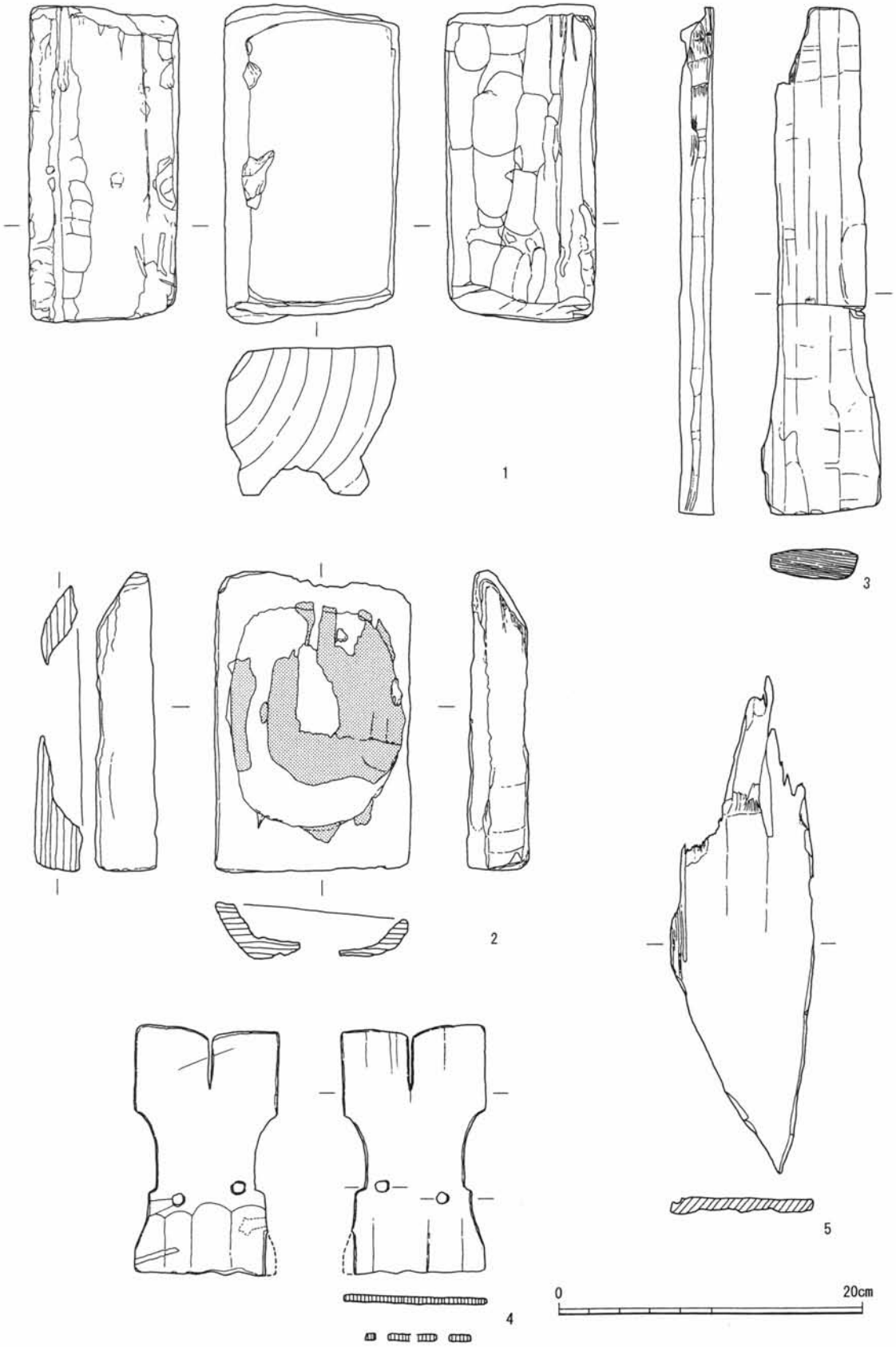
17はＳＤ08出土の板状木製品である。長さ19.3cm、幅5.5cm、厚さ1.0cmを測る。

18は荷札状木製品である。上部中央に紐通し穴を穿ち、その上部に紐ずれ痕が観察できる。両側面に紐かけ用の切り込みを施している。墨書等は観察できない。残存長18.4cm、幅3.4cm、厚さ0.9cmを測る。

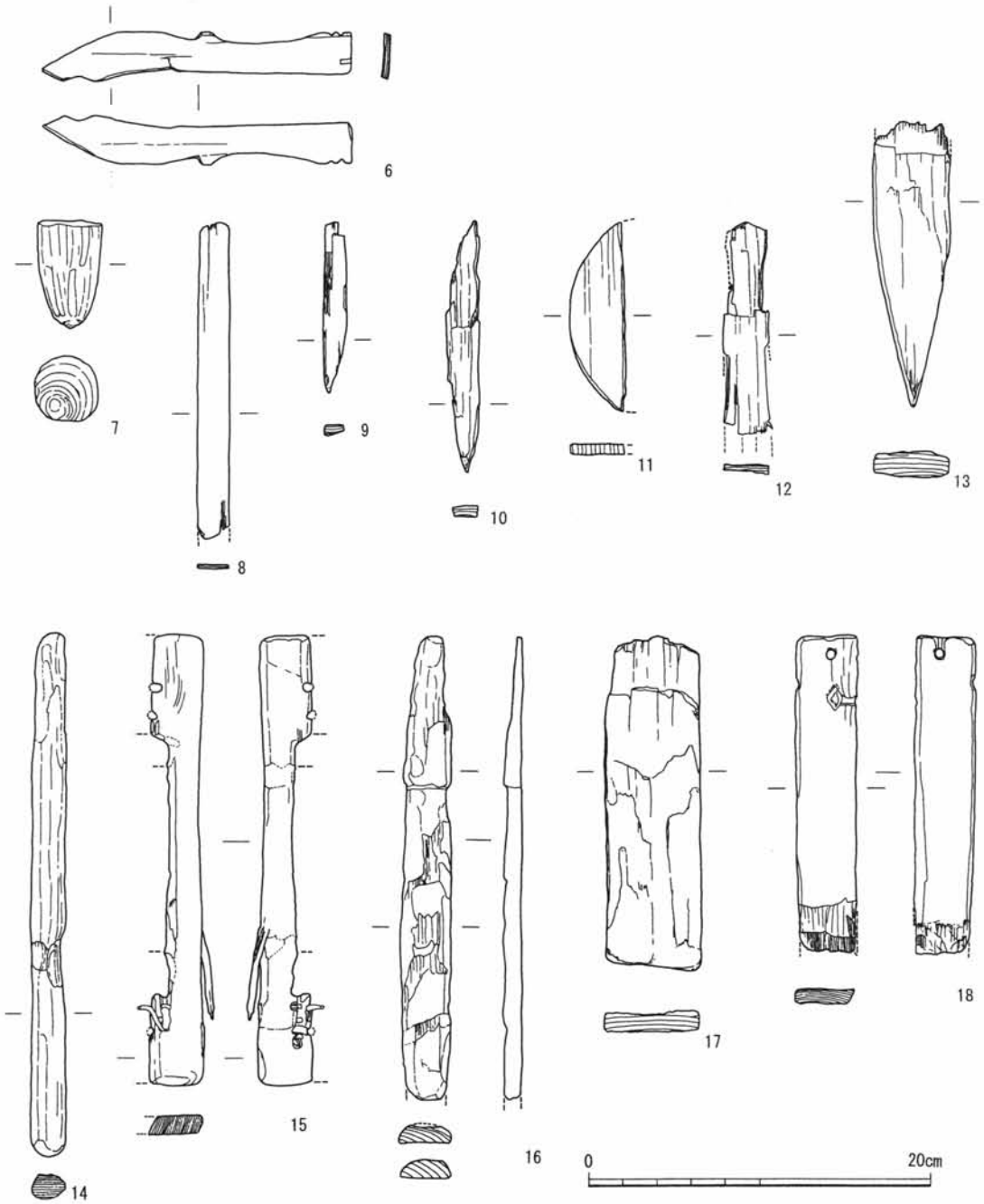
19・20は有頭の製品である。19は棒状、20は板状でそれぞれの製作された時代も違い、使用用途も異なると考えられる。19は長さ33.1cm、幅3.35cm、厚さ1.65cmを測る。20は二枚に割れており接合しないが残存長40.4cm、幅5.8cm、厚さ1.2cmを測る。

21は先端部加工の板である。鋭角に削り出した側面には鉄製工具による加工の特徴である刃こぼれによる刃線痕を止める。長さ47.8cm、幅4.5cm、厚さ0.7cmを測る。

22は平面の形が隅丸を呈する桶または曲物の底板である。残存長25.0cm、残存幅5.3cm、厚さ1.0cmを測る。




第24図　出土遺物実測図(11)



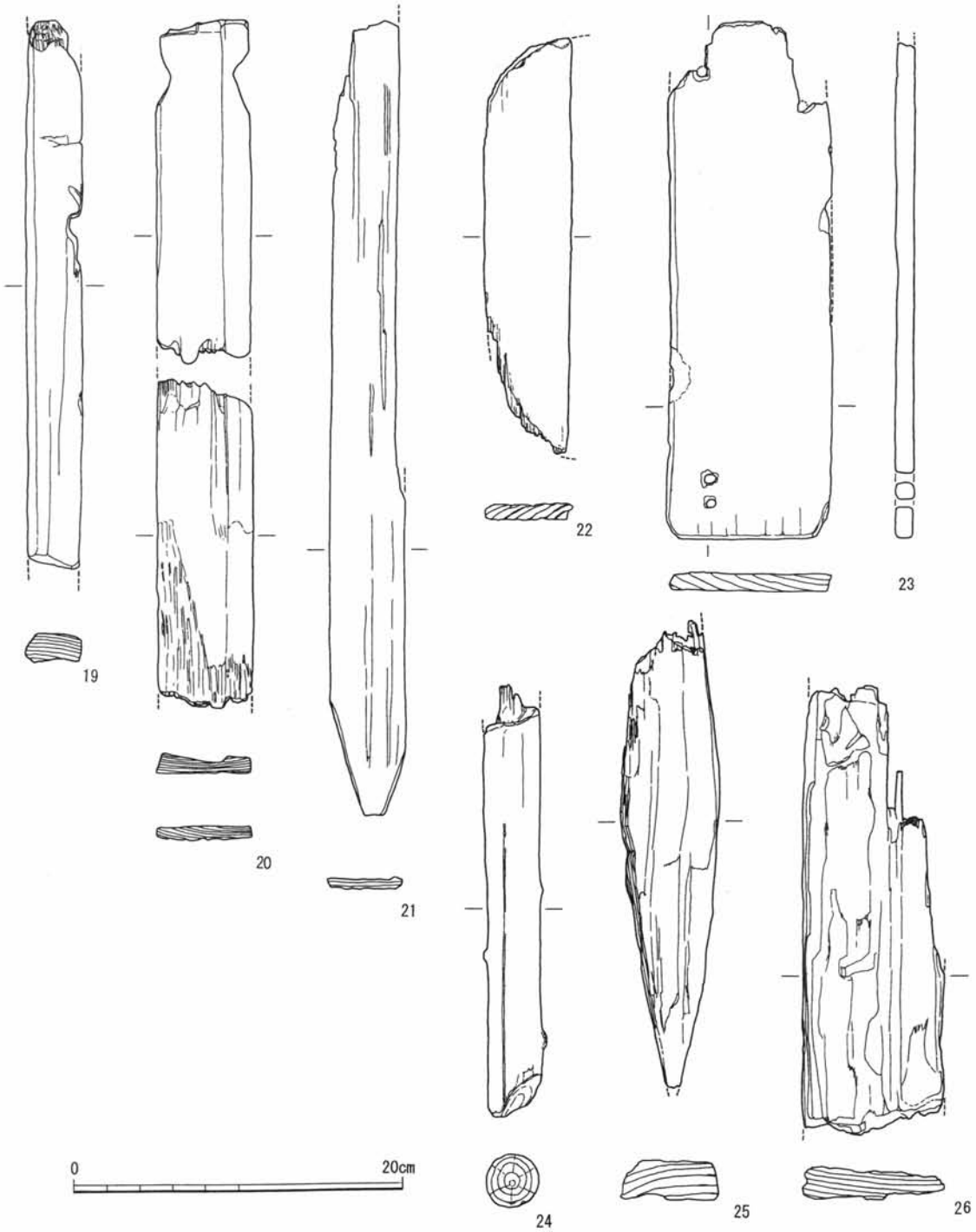

第25図　出土遺物実測図(12)

23は組具の板である。一方は両側面よりにそれぞれ穴を穿っている。2個一対の穴の可能性があるが両辺とも欠損しており明らかでない。もう一方は片側1か所に2個一対の穴を穿っている。長さ31.3cm、幅10.0cm、厚さ1.2cmを測る。

24は広葉樹の芯持ち材で先端部の加工痕に刃線痕を止める。ヌルデ等のしなりのある材質である。残存長26.2cm、直径3.2cmを測る。

25は杭状の加工品で、手斧による加工痕を止める。材質は針葉樹、木取りは板目である。残存長28.2cm、残存幅5.3cm、厚さ2.3cmを測る。

26は25同様で、矢板の破損品の可能性が考えられる。材質は針葉樹、木取りは板目である。残存長25.0cm、残存幅5.3cm、厚さ1.0cmを測る。




第26図　出土遺物実測図(13)

## ４．まとめ

今回の調査では、弥生時代の竪穴式住居跡２基、土器溜まり、谷状地形、古墳時代の護岸施設２か所、奈良・平安時代の掘立柱建物跡２棟、溝２条や柵列などを確認することができた。調査地周辺部において弥生時代・古代の集落跡が存在する可能性を示すことができた。また、布目瓦片の出土や粘土を採掘したと考えられる土坑の検出は、この調査地のごく周辺に瓦や須恵器を焼いた窯が存在したことや、墨書土器・稜椀・人形・鳥形などの出土から古代官衙、寺院等の施設

の存在をうかがわせるものであり、その解明については今後の調査に期待をしたい。

縄文土器の型式名・時期の認定については立命館大学文学部教授の矢野健一氏にご助言をいただいた。木製品の年輪年代測定にあたっては、独立行政法人奈良文化財研究所の協力を得た。文末ではあるが記して感謝したい。

（黒坪一樹・戸原和人）

**調査参加者**　八瀬由香里・小島健之助・丸谷はま子・村上優美子・清水友佳子・陸田初代・中島恵美子・槻　啓宏、村岡弥生

**参考文献**

「河守遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第20冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1986

「河守遺跡第２次発掘調査概要」（『大江町文化財調査報告書』第３集　大江町教育委員会）　1997

「河守遺跡第３次発掘調査概要」（『大江町文化財調査報告書』第５集　大江町教育委員会）　1998

「河守北遺跡発掘調査概要」（『大江町文化財調査報告書』第５集　大江町教育委員会）　1998

「河守北遺跡・河守遺跡発掘調査概要」（『大江町文化財調査報告書』第11集　大江町教育委員会）　2003

高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター（「高槻市文化財調査報告書第18冊　芥川遺跡発掘調査報告書－縄文・弥生集落の調査－」）　1995

竹野町教育委員会（「竹野町文化財調査報告書第８冊　小森岡遺跡」）　1990

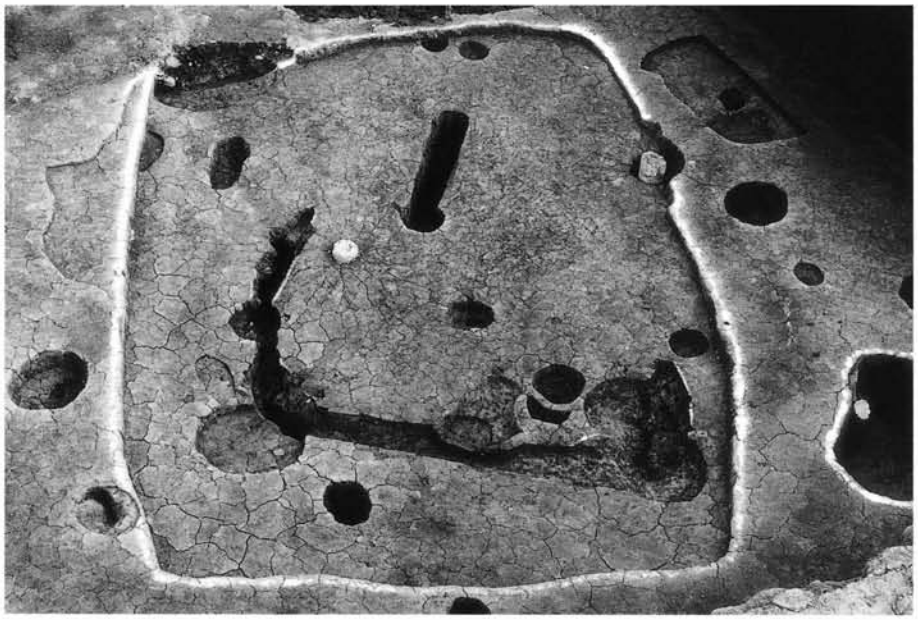
# 図　　版

(1)第１トレンチ全景(北東から)

(2)掘立柱建物跡ＳＢ01(南から)

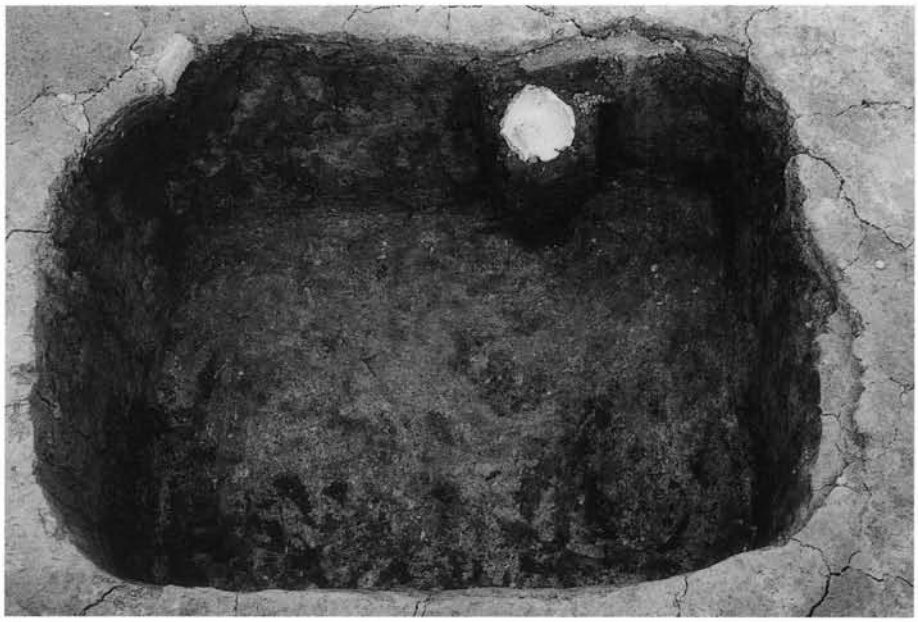
(3)掘立柱建物跡ＳＢ02(東から)

(1)竪穴式住居跡ＳＨ03－１
（北西から）



(2)竪穴式住居跡ＳＨ03－２
（北西から）

(3)竪穴式住居跡ＳＨ03
遺物出土状況（北東から）



(1)土坑ＳＫ104青磁出土状況
（西から）

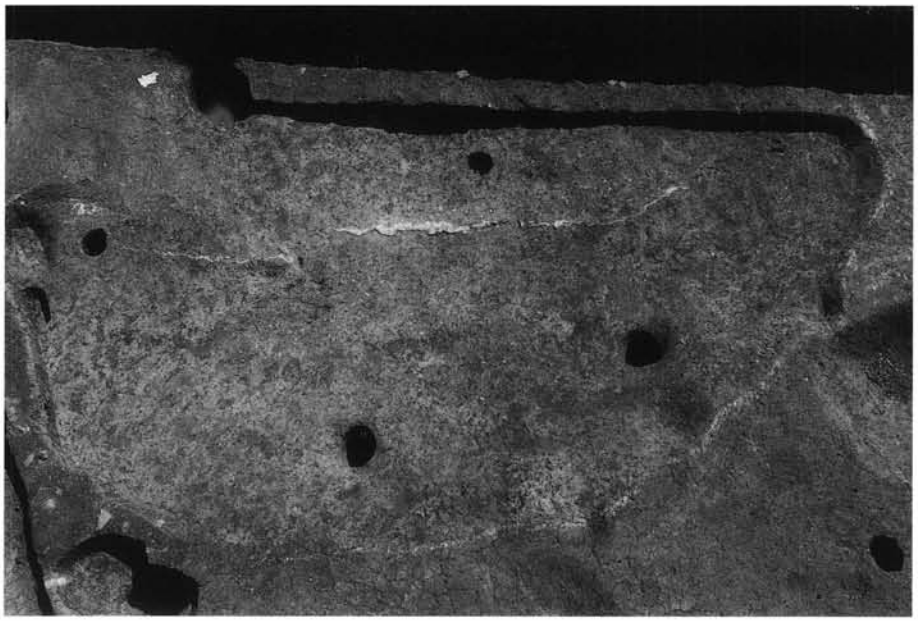
(2)第２トレンチ全景(上が北西)

(3)第２トレンチ全景(南西から)

(1)竪穴式住居跡ＳＨ04(東から)

(2)竪穴式住居跡ＳＨ04
遺物出土状況(北から)

(3)土坑ＳＫ201検出状況
(北東から)



(1)土坑ＳＫ201完掘状況
（北西から）

(2)第３トレンチ全景(上が西)

(3)土坑ＳＫ16全景(西から)

(1)谷状地形ＮＲ07(南西から)

(2)第３－３トレンチ検出状況
(南東から)

(3)石見型木製品出土状況
(南から)

(1)堰状遺構ＳＸ15(南から)

(2)土器溜まりＳＸ09検出状況
(西から)

(3)ＳＸ09遺物出土状況(東から)

(1)第３－３トレンチ完掘状況
（南東から）

(2)第４トレンチ全景（上が西）

(3)第４トレンチ全景（北から）

(1)溝ＳＤ17遺物出土状況２
（南から）

(2)漆土器184出土状況（南から）

(3)護岸施設ＳＸ18・19検出状況
（南から）

9

99

21

SH03

102

138

29
30
31

出土遺物１

150

148

154

157

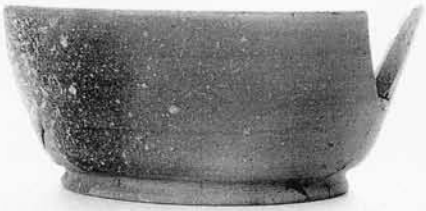
158

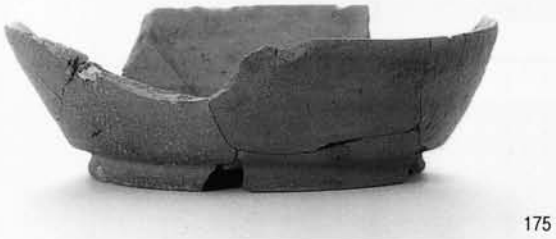
164

162

166

168


173


175

167

177

184

167

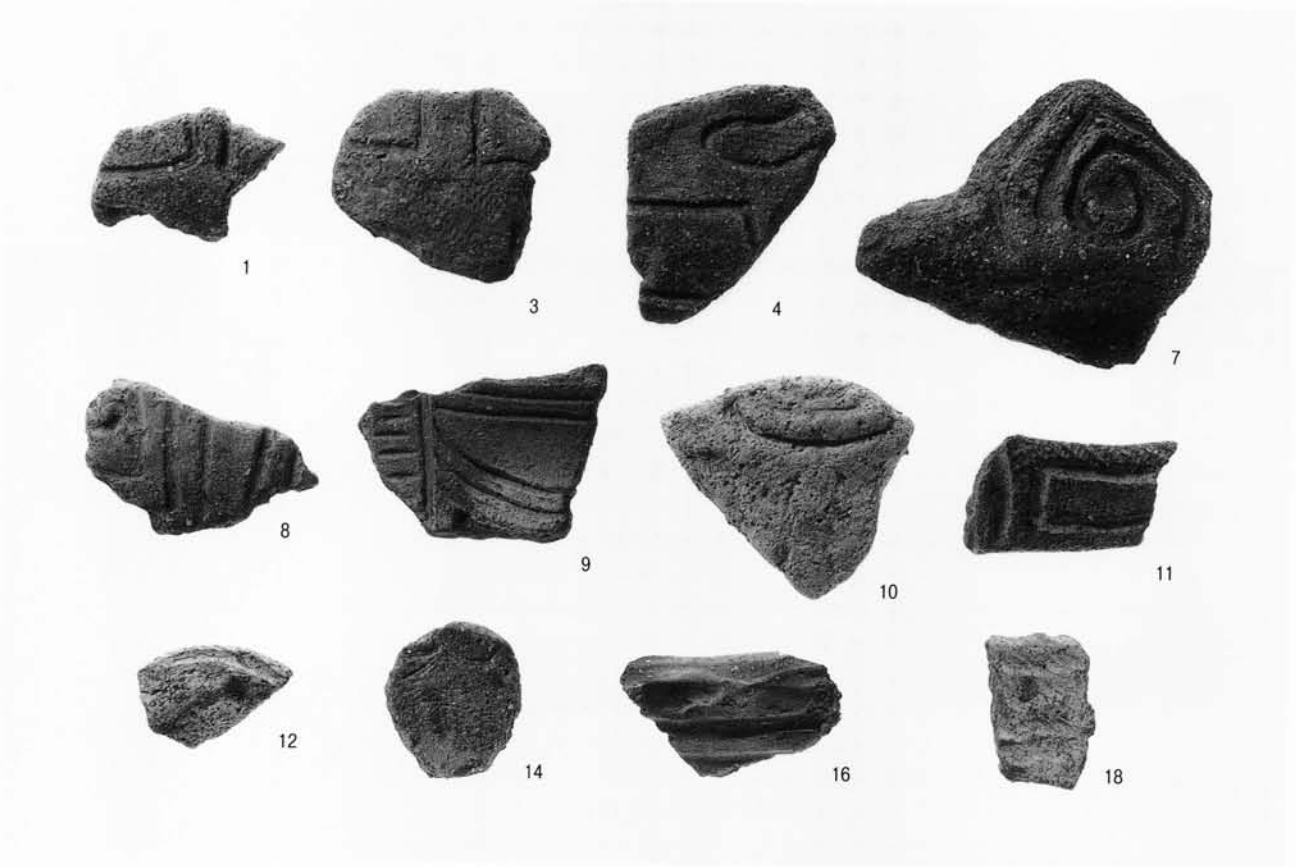
202

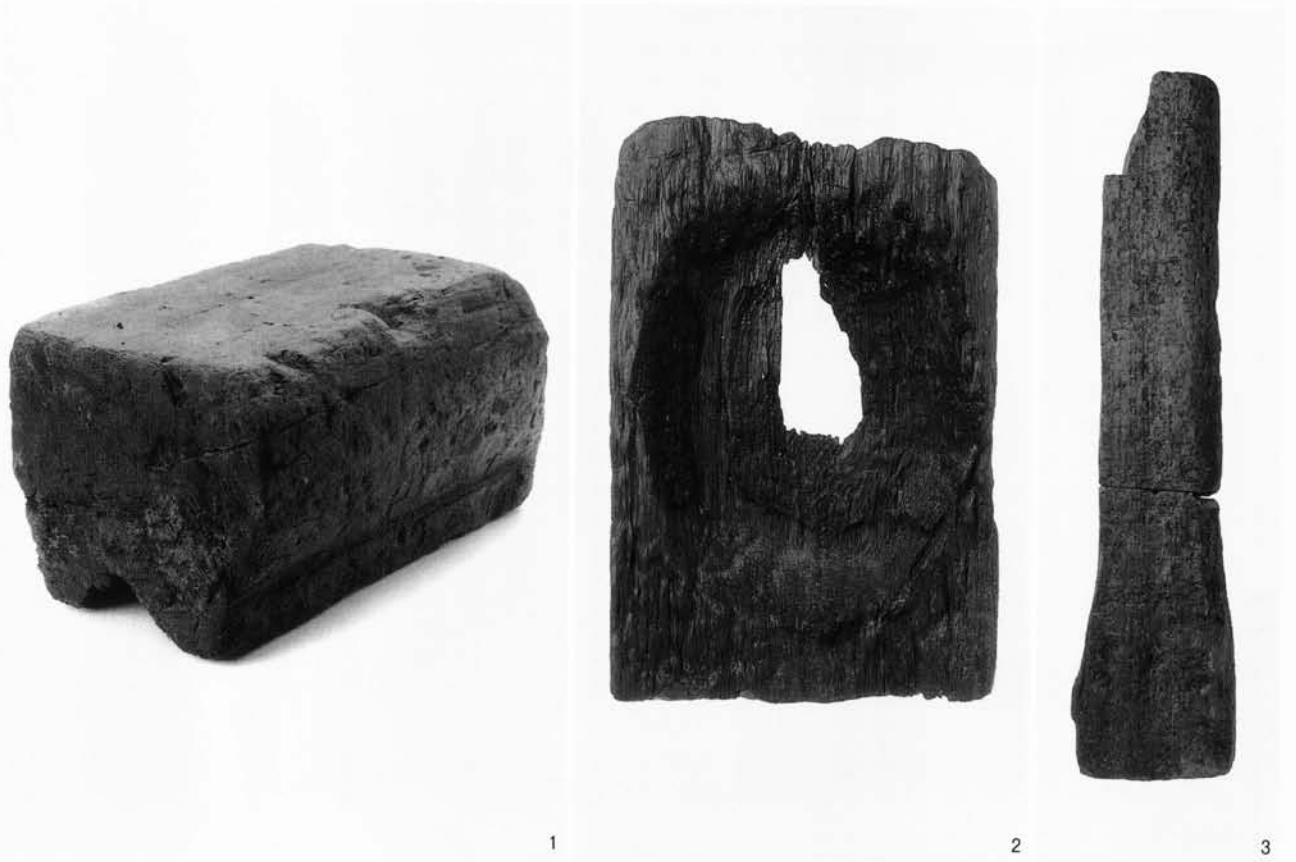
203

205

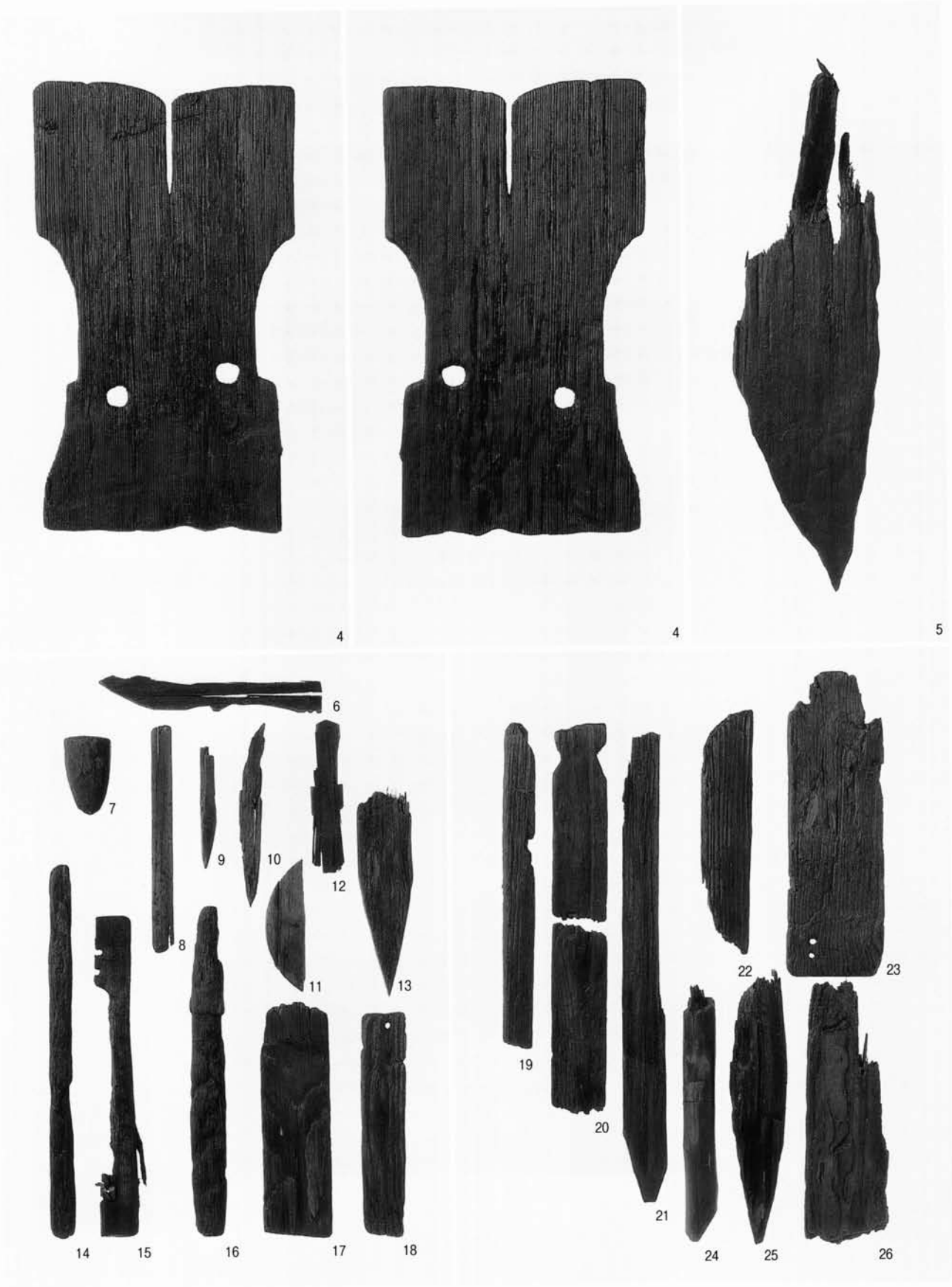
206

204




出土遺物４




出土遺物５